

# 九大広報

Kyushu University Campus Magazine

vol. 59

2008.9

九大  
至宝

文系合同図書室蔵  
世界  
人物図巻



インタビュー・シリーズ九大人

梶山 千里

第21代九州大学総長

村山 由香里

株式会社アヴァンティ 代表取締役社長

総長 アショク・ミスラ  
対談

インド工科大学ボンベイ校 学長

前回、前々回と続けて、近代の日  
本人が如何に江戸という時代と向き  
合って来たかを辿って、平成の今日、  
漸く江戸を江戸に即して眺める視点  
の重要性に気づいたこと、そしてそ  
れこそがとりも直さず本場に近代を  
成熟させる鍵であることなどを述べ  
てみました。

では、そのような視点は、どうし  
たら獲得出来るのかと言えば、残念  
乍らタイム・マシーンがない今日、  
その確かな手段はたゞ一つ、書物に  
拠る他はありません。それも江戸期  
に出版された書物、即ち和本をチャ  
ンネルとする以外には考えられない  
のです。

江戸を伝え、江戸の確かな手触り  
を実感させてくれる文物は、和本以  
外にも数多くありますが、和本ほど  
広範に、そして論理的に江戸を納得  
させて呉れるものは、他にはない筈  
です。

江戸は間違いなく書物文化の時代  
となりました。江戸時代三百年の間、  
書物はあらゆる階層に及び、その中  
の森羅万象を伝えて余す所がありま  
せん。いわば江戸人の意識し得た全  
世界が、そこにはあると言えましょ  
う。江戸以前の文化現象の殆んど凡  
ても、江戸に入って文字に定着し、  
以前に写本として文字化されていた  
ものも、その多くが出版されて流布  
することになりました。源氏も平家  
も徒然も万葉も八代集も、書物とし  
て現存するもののは大半は江戸に入っ  
て作られたものなのです。従って江  
戸を江戸に即して眺める為の最良の  
手段は江戸の書物を江戸の姿で享受  
することに尽きるのです。ところが  
切角その方法が明確になった今にな  
って、実は最大のネックが露わにな  
ってきました。

江戸の書物の基本単位は漢字と仮  
名です。漢字は楷書もありますが大  
方は草書体であり、仮名は殆んど変

体仮名を用います。草書体の漢字も  
通俗書の場合は大方変体仮名の振り  
仮名がありますから、江戸の書物を  
江戸の姿の俣で読む為には、要する  
に和本リテラシーは絶対必要なので  
す。ところが平成廿年の今日、日本  
人はこの能力を決定的に失いました。  
例えば九大文学部の教員の場合でも、  
江戸の書物を江戸人と同じスピード  
で読み且つ理解出来る人は一割が限  
度でしょう。大学全体での割合は、  
およそ言うのも無駄と思います。  
但し、これは何も貶めるつもりで  
はありません。この状況は明治の近  
代国家志向の時点で既に殆んど決定  
的ではありました。日本の学知のベ  
ースが西洋学となったからです。そ  
の後、科学としての学問の宿命とし  
て細分化は進み続け、遂に江戸研究  
に志す学者でない限り、江戸の書物

は殆ど無用の物となりました。結果、  
日本の知識人の九割九分迄が、外国  
語の達人ではあっても日本の古典語

は読めない、いや読む必要がなくな  
ってしまっていたのです。実際、今  
風の研究者としては、何の痛痒も感  
じないのが至極当然。それに、必要  
な古典は殆んど活字化されているの  
で、それで十分というのでしょうか。  
でも本場にそうなのでしょいか。実  
は和本の活字化なんて全体の一割に  
も満たず、ましてその凡ては前述し  
た近代主義的観点で選択された古典  
に過ぎません。我々が近代の成熟を  
本気で企てる限り、和本リテラシー  
は絶対必要なのです。そして、この  
リテラシーは回復可能なものでしょう  
か。実は至って簡単なことのように  
思います。  
それは次回に。

### 中野三敏 (なかのみつとし)

国文学者

一九三五年福岡市生まれ。六四年早稲田大学大  
学院文学研究科日本文学専攻修了。七二年九州  
大学文学部助教授、八二年同教授、九九年退職。  
九八年紫綬褒章受章。

# 九大

Kyushu University Campus Magazine

# 広報

# vol. 59

2008.9

編集発行 九州大学広報専門委員会

事務 九州大学総務部広報室

住所 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

電話 092-642-2106

FAX 092-642-2113

E-mail koho@jimu.kyushu-u.ac.jp

URL http://www.kyushu-u.ac.jp

印刷 アイメディア株式会社

巻頭エッセイ

江戸ばなし

名誉教授

中野三敏

1

インタビュー・シリーズ九大人

第二十二代九州大学総長

梶山千里

3

インタビュー・シリーズ九大人

株式会社アヴァンティ 代表取締役社長

村山由香里

9

研究の話題

- グローバルCOEプログラム……………13
- 産学連携の取り組み……………15
- 三井造船(株)との組織対応型連携について……………15

シリーズ研究・ふろんとランナー

比較社会文化研究院教授

小山内康人

17

総長対談

インド工科大学ボンベイ校学長

アシヨク・ミスラ

九州大学 総長

梶山千里

21

ニュース

- 次期総長に有川節夫理事……………28
- 桜井龍子さんが最高裁判事に……………28
- 国公私の三大学で共同シンポジウム……………28
- オープンキャンパスに一万五千人……………29
- アントレプレナーシップシンポジウム開催……………29
- ウォーキングツアーで糸島を散策……………30
- イノベーション人材養成センターが開所……………30

同窓会の話題

- 平成二十年 東京同窓会ビアパーティ……………31

九大生が案内する世界のキャンパス

- ボルドー第三大学……………32

告知版

- 北大・九大 合同フロンティア・セミナー……………33
- 伊都祭二〇〇八……………34
- ホームカミングデー二〇〇八……………34

新聞で報道された九州大学

- 平成二十年六月〜七月……………35

ようこそ九州大学へ……………37

九大至宝 (表紙写真説明)……………38

編集後記……………38

□ お読みになってのご感想やご意見をお待ちしています。

□ 投稿をお受けします。文字数は、300字未満。手書きのものも受け付けますが、できればテキストファイルのフロッピーディスク又はEメールでお送りください。可能な限り掲載しますが、本誌の目的や性格に照らして不相当と思われる原稿は掲載しません。

■ 九州大学関係者が本誌記事を転載する場合は、「九大広報第〇号から」と明記してください。学外の方は、事前に事務までご連絡願います。

■ 「九大広報」は九州大学ホームページでもお読みいただくことができます。

■ 次号は、2008年11月発行予定です。



第二十一代九州大学総長

# 梶山千里

かじやま  
ちさと

〔任期：平成十三年十一月七日～  
平成二十年九月三十日〕

平成二十年九月三十日の任期満了を  
目前にした梶山千里総長に、これまで  
とこれからの聞き采访了。



略歴

昭和三十九年三月 九州大学工学部応用化学科卒業  
昭和四十一年三月 九州大学大学院工学研究科応用  
化学専攻修士課程修了  
昭和四十四年五月 アメリカ合衆国マサチューセツ  
ツ大学大学院高分子工学科博士  
課程修了(Ph.D.)  
昭和四十四年六月 アメリカ合衆国マサチューセツ  
ツ大学高分子工学科研究員  
昭和四十五年八月 九州大学助手  
昭和五十年十月 九州大学助教授  
昭和五十九年十一月 九州大学教授  
平成十二年四月 九州大学大学院工学研究院長  
平成十三年十一月 九州大学総長  
平成十五年六月 国立大学協会副会長  
平成十六年四月 国立大学法人九州大学総長

専門：高分子構造・物性、有機材料

## 転校生、独立心を養う

— 小学から高校までは入学してそのまま卒業した学校がなかったとか。

**梶山** 入学してそのまま卒業したのは九州大学が最初でした。父の勤務の関係でね。

— 転校が続いて、いろいろ苦労があったのではないですか？

**梶山** そうですね。例えば高校は、入学したのは長崎西高校で、二年生の九月から卒業までは福岡県の鞍手高校。校風が全く違いました。また、転校してみても分かったので、長崎西で一年のときに受けた生物が、鞍手では二年でやってきた。数学も高校の三年間を通じて幾何は二回受け、微積分は結局授業を受ける機会がありませんでした。でも転校には慣れていたので、まあこんなもんだと思いい、授業で学ぶことができなかつた科目

は自習しました。

— そのような中で、印象に残る先生はいらっしゃいますか？

**梶山** 鞍手高校の二年と三年で数学を習った蟹川先生は、私が習いに行くとき「家で解いて来るからちよつと待て」と仰つて翌日解答を作つて来てくださるのですが、私のと答えは一緒でも解き方が違う。数学にはいろいろな解き方、アプローチの仕方があることを教えていただきました。化学の日高先生は九州大学の応用化学出身で、私は二年生なのに一年のクラスに受けに行つていたので、化学の面白さ、九州大学応用化学科の内容がやすばらしい教授陣のことを話してくださつて、私が九州大学を受験するきっかけを作つた恩師であり先輩です。

— 勉強熱心な転校生という印象です。

**梶山** 転校は、父が働いているわ

けですから、苦勞する状況でも素直に受け入れて、やるべきことは他人に頼らず自分でやつていた。そういう意味では独立心は養えたのかもしれない。ただ、知識の修得だけなら一人でもやれるでしょうが、日高先生に受けたような感銘や出会いは、やはり学校に行つて授業に出てこそ得られるものです。

— 座右銘は、小学生のときに出会つた言葉だそうですね。

**梶山** 昭和二十八年、福岡の玉川小学校です。土井校長先生が冬に亡くなつてしまわれて、卒業式で校長代理を務められた末広教頭先生が、卒業生全員約一八〇人に色紙に書いて渡された言葉です。

「人並みの努力は人並みに終わる」。人生に失敗はつきもので、私も数々の失敗を重ねてきました。でも、この言葉があつたからそれを素直に受入れ、次のステップの

糧にすることができた。人生に言い訳をしなくなつたと思います。

— この言葉を理解して受入れたとは、かなり早熟な小学生だったようです。

**梶山** 感銘を受けた言葉や経験を、その人がどう活かすかで差が生じます。科学でもそうで、科学する力の基本は観察力、洞察力、展開力。日常でも身の回りのことに興味を持つて不思議だなと感じ、答えを求めようとする習慣が個人的な考え方や独創性を育て、創造につながる。科学の創造性とは自分で磨いて育てるものなのです。

## 猛烈に遊び学んだ 九大、留学時代

— 九州大学入学は六十年安保の頃ですね。まず読書に打ち込んだとか。

**梶山** めちゃめちゃな乱読もした

統合、移転、法人化は、新しい教育研究が可能になる、  
新生九州大学創りの絶好のチャンス。

## 梶山千里九州大学総長 インタビュー

が、社交ダンスもほぼ毎日欠かさずに行った。週五回は家庭教師をして、時間を見つけて音楽会などにも行き、それでも講義の予習に手抜きはしませんでした。時間を人の二倍くらい使って行動したけど、苦にはならなかった。大変でも楽しんでやれるし、一生懸命打ち込んでいることでも固執せずぐ次に移ることができる。性格で

すね。それに、健康であったからできたと思います。親に感謝しています。

— 修士を終えて米国留学。マサチューセッツ大学高分子工学科の博士一号だそうですね。

**梶山** 九州大学での恩師、高柳素夫先生は高分子物理の超一流の研究者で、ダイナミックな講義に感銘を受けてその研究室に入りました。

た。高柳研究室には、当時としては珍しく、私の他にもう一人博士課程進学希望者がいました。「二人同時にめんどろを見るのは大変だから一人は外国に行け」ということで、もう一人がまず留学に立候補したのですが受け入れ先の都合で行けなくなり、「では梶山さんです」。

修士二年の夏休みに、京都大学で日米の学者が集まって高分子の国際会議がありました。その時、有名な米国人研究者たちの発表を見て、日本の研究者たちは「自分たちも世界に伍してやっていける」と思った。昭和三十七―八年頃です。その中に、プリンストン出身で、若くして当時高分子物理の中心だったマサチューセッツ大学の教授になったスタイン先生がいた。先生の案内役だった私が歩きながら留学の相談をすると「私の所へ来なさい」と言ってくれました。それが始まりです。

— 世界で最も水準の高い、しかも米国の大学で博士号というのは大変だったのでは？

**梶山** 英語は一年目は苦勞しました。勉強では在学中ずっと苦勞。米国の大学はよく勉強させます。授業は三単位で一週間に三回ありました。だからいつでも抜き打ち試験ができる。常に緊張状態です。二年目の後期に四科目選択しましたら、米国人学生から「僕たちでも三科目が限度。死ぬぞ」と言われました。そう言われると小さい頃からの独立心が騒いで四つ取りました。ちょうど高分子工学科の設立時で、私を含めて二名の博士候補生がいましたが、もう一人の学生の成績は悪く、私が博士の第一号となりました。そのときはさほどに思わなかったけど、第一号の重さが今分かります。記念式典などへも呼ばれますしね。

米国での学位取得は簡単とは言いませんが、私の前の世代と比べ



ると少しは楽だったと思います。先輩方は文字通り日の丸を背負って勉強していました。私は平日は懸命に勉強したけど、米国の社会を知り楽しみたいとも思っていたので、週末はいろいろやりました。米国の大学は厳しくて、必死で勉強しても学部を卒業できるのは六割くらいかという感じでしたが、週末はまたどんちゃん騒ぎでリラックスしている。時間や行動にメリハリを付けていますね。

## 第二十一代総長として

— 平成十三年十一月に総長に就任されたとき、九州芸術工科大学との統合（平成十五年十月）、国立大学法人化（平成十六年四月）、移転（平成十七年十月移転開始）の三重苦を引き受けた総長、と言われました。

**梶山** 大事なものは、九州大学はその前（平成十二年四月）に大学院重点化の完了とともに「学府・研究院制度」を設け、組織再編を行

っていたということです。ただ、組織再編はやったが、研究者の居場所は以前のままで、ばらばらでいるか他組織の研究者との混住。実質的な効果を伴っていないかった。組織と居場所を一致させて再編の効果をあげるためにも新しいキャンパスへの移転は必要でした。また芸術工学部門が加わったことで、九州大学の活動の幅が大きく広がった。加えて、私は法人化を大学の自由度を広げ得るものと捉えていた。統合、移転、法人化で新しい教育研究が可能になる、新生九州大学創りの絶好のチャンスだと思いました。現実には、泣きごとを言っても運営費交付金は来ない。後ろ向きの議論は九州大学を豊かにはしない。では、策を講じて前へ進むしかありません。

— 4+2+4アクションプランの提示、Q・S・TARSと呼ばれる五つのセンターの設置・拡充、研究スーパースターの選抜と、次々にメッセージを発信して注目されました。



**梶山** 4+2+4はどれも当たり前前のことですが、やるべき分野、向かうべき方向、支援の形を分けるように示したものです。Q・S・TARSは、先を見据えてトップダウンで組織と人を揃えたもの。研究スーパースターは手の届く目標を皆に見せたいと思い、私が選びました。

— 約七年間の在任中に、「大変だった」と印象に残っていることは何でしょうか。

**梶山** 平成十三年十一月に総長に

なつて翌年の三月末のことです。いったん出した医学部への入学許可を取り消すということがありました。三月末になって、一人の合格者が、社会的に大きな事件を起こした団体の事件当時の幹部だったことが判明したのです。問題を四月まで引きずりたくなかったので、早急に決着させる必要がありました。様々な意見が出ました。入学許可の取り消しというのは異例中の異例で、裁判になれば負けるかもしれない。就任して間もな

## 個々の構成員がいかに努力するか。 研究者はそれぞれが新領域を拓くつもりでがんばってほしい。

い総長として最終判断を下さなければならなかったのですが、非常に厳しかった。事が重大であるほど、最終判断は孤独なものになります。結局最後は、九州大学の学生はどうあるべきかを基に、これは人として許せないから九州大学は入学許可を取り消す、と決めました。責任を問われて総長を辞めなければならぬかもしれないが、私一人としての、許すこととはできないという気持ちを唯一のよりどころとしてそう判断しました。

### これからの九州大学に望む

— 任期の最後に当たって、九州大学に言っておきたいことは？

梶山 九州大学は、世界を先導する教育研究機関として、高い実力とブランド力が一体となった大学

でなければなりません。そのためには、個々の構成員がいかに努力するか。研究者はそれぞれが新領域を拓くつもりでがんばってほしい。

大学は人材育成の場であり、教育研究が基本であることを忘れてはいけません。だから基礎研究を大事にしなければならぬのです。ただ、今は社会貢献が強く求められています。学生や研究成果を受け取る社会や企業、自治体などそれぞれのステークホルダーが何を求めているかを理解しておく必要があります。そうすると、努力や投資が倍になって戻ってくる。それが現在における一流大学の条件です。

— 九州大学の現状をどう認識しますか？

梶山 部局長を含めて、九州大学

の置かれている立場、置かれている場所の分かっている人がまだまだいるのではないのでしょうか。むしろ大学外のの方が、今九州大学は何をなすべきかがよく見えている。それらの人が異口同音に言うことは、九州大学の教職員は現状認識が甘すぎるということだと思います。もっと外部の人と付き合うといいのです。そうすると社会の状況や意見が分かる。大学に文句を言っている暇はないと認識する。

九州大学は総合大学。人文社会系、自然科学系を問わず、いろいろなことを積極的にどんどんやって、高いアクティビティを維持していただければいいと思います。

— 最後に、七年間の激務を全うできた健康の秘訣と、今後の予定を。

梶山 健康は特に注意しているわ

けではありません。あえて言えば、中学生の時から朝四時に起きていて、今は毎日一万歩は欠かさない。週一回のテニス、できるときは週末の丘歩き、酒は一年三六〇日(笑)。短時間でも深く眠れて、外国旅行でも着いた日に現地時間に順応できるのは特技かな。やりたいことは、二年かけて読んでいる現代語訳の古典全集を読み終えること。しばらくゆつくりさせてほしいだけだね。

— どうもありがとうございます。二期六年十一月、お疲れ様でした。

このインタビューは、平成二十年九月三日(水)、箱崎キャンパスの総長室で行われました。

## 梶山 千里総長 在任中の主な動き

[在任期間:平成13年11月7日～平成20年9月30日]

平成13年(2001)	
11月	梶山総長就任

平成14年(2002)	
1月	■九州大学学術憲章を制定
2月	■九大・糸島会を設立 ■新キャンパス(1工区)造成が竣工
4月	■国際交流推進機構、国際交流推進室を設置 ■新病院第1期棟(南棟)を開院
5月	■リサーチコアを認定
9月	■九州大学東京オフィスを設置

平成15年(2003)	
1月	■新キャンパス起工式を開催 ■九州大学学術研究都市構想促進東京会議が設立
4月	■専門職大学院経済学府産業マネジメント専攻(ビジネス・スクール)を設置
10月	■九州大学と九州芸術工科大学とを統合 ■医学部附属病院、歯学部附属病院、生体防御医学研究所附属病院を統合・九州大学病院を設置

平成16年(2004)	
3月	■シンボル及びシンボルカラーを決定
4月	■国立大学法人化(国立大学法人九州大学となる) ■理事(兼副学長6人)8人、監事2人体制を導入 ■専門職大学院法務学府(法科大学院、ロースクール)を設置 ■水素利用技術研究センターを設置 ■ロンドン、カリフォルニア(シリコンバレー)、ミュンヘン、ソウルに海外オフィスを設置 ■ユーザーサイエンス機構を設置 ■九州大学4+2+4アクションプランを策定
5月	■九州大学東京同窓会を設立
9月	■新移転スケジュールを決定(平成31年度を目途に移転完了の予定)
10月	■ソウル大学校(韓国)にランチ・オフィスを設置 ■財団法人九州大学学術研究都市推進機構が設立
11月	■研究スーパースター支援プログラムを創設 ■第5回アジア学長会議を開催

平成17年(2005)	
2月	■Big Orangeを開所
3月	■新キャンパス(III工校区)造成が竣工
4月	■専門職大学院人間環境学府実践臨床心理学専攻を設置 ■戦略的教育研究拠点として、システムLSI研究センターを拡充 ■戦略的教育研究拠点として、未来化学創造センター、バイオアーキテクチャーセンターを設置 ■新キャンパスの名称を「伊都キャンパス」に決定
7月	■戦略的教育研究拠点として、デジタルメディスン・イニシアティブ、アジア総合政策センターを設置
8月	■ガジャマダ大学(インドネシア)にランチ・オフィスを設置 ■ユーザーサイエンス機構大橋サテライト・ルネットを設置
10月	■伊都キャンパス第1期開校 ■早稲田大学と連携に関する基本協定を締結

平成18年(2006)	
1月	■九大あかでみつくらんたんを開所
2月	■第1回九州大学・北海道大学21世紀COEプログラム活動報告会を開催
3月	■第1回ロバート・ファン/アントレプレナーシッププログラムinシリコンバレーを開催(以後、毎年開催)
4月	■北京、バンコクに海外オフィスを設置 ■新病院第II期棟(北棟)を開院 ■全学教育新カリキュラムを実施
5月	■創立95周年開学記念講演会で稲盛和夫京セラ株式会社名誉会長が講演 ■在インドネシア九州大学同窓会を設立
6月	■高等教育機構を設置
7月	■次世代研究スーパースター養成プログラムを実施 ■独立行政法人産業技術総合研究所が水素材料先端科学研究センターを設立(伊都地区)
9月	■北京事務所開所記念「日中學術交流国際シンポジウム」を中国で開催 ■新移転スケジュールを決定(六本松地区から伊都地区へ直接移転)
10月	■学生寄宿舎(ドミトリー1)を開所 ■伊都キャンパス農学研究院分室を設置 ■伊都キャンパス第2期開校
11月	■大学院共通教育を開始
12月	■ICキャンパス実証実験を開始(伊都地区) ■九州大学百周年記念事業「学内教職員募金」を開始 ■第1回ホームカミングデーを開催 ■三位一体の改革を決定

平成19年(2007)	
1月	■新シンボルロゴを決定
2月	■百周年記念事業推進会を設立 ■株式会社日本格付研究所の財務格付「AAA」を取得
4月	■教員の報奨制度実施要項(研究・産学官連携関係)、全学教育活動表彰要項を制定 ■梶山総長がマサチューセッツ大学同窓会2007特別同窓会賞を受賞
5月	■梶山総長がマサチューセッツ大学から名誉博士号を授与される
7月	■総長直轄型の大型研究プロジェクトに係るシステム改革を決定 ■百周年記念事業推進会東京部会を設立
8月	■先端融合医療レドックスナビ研究拠点を開所
9月	■釜山大学校との共同授業を開始 ■東アジア環境問題プロジェクトチームを発足
10月	■カリフォルニアオフィスからの遠隔講義を開講 ■第2回大学サミット・イン・九州を開催
11月	■フロンティア研究センターを設置 ■百周年記念事業推進会関西部会を設立 ■マヒドン大学(タイ)にランチオフィスを設置
12月	■百周年記念事業シンボルマークを決定

平成20年(2008)	
3月	■新キャンパス(第2工区前期)造成が竣工 ■財団法人稲盛財団から「稲盛財団記念館」、京セラ株式会社から「稲盛フロンティア研究センター奨学寄附金」寄附贈呈式 ■炭素資源国際教育研究センターを設置
4月	■福岡市設置の産学連携交流センターに未来化学創造センターサテライトを設置 ■九州大学・福岡女子大学・西南学院大学との連携協定を締結
6月	■九州大学大阪オフィスを設置 ■九州大学関西同窓会を設立

シリーズ  
九大人  
インタビュー



株式会社アヴァンティ 代表取締役社長

# 村山 由香里

むらやま ゆかり

一九九三年に起業し、「働く女性を応援するネットワーク型情報誌」というコンセプトのもと、「アヴァンティ」を発行。創刊十五周年を迎え、読者登録企業数は福岡、北九州、熊本エリアで三万五千社。約二十人のスタッフを抱える会社に成長させた村山由香里さん。「女性たちが働き方や生き方を考え、勇気と希望を感じる情報誌づくり」を理念に、編集力、提案力、企画力で着々と築き上げたユニークな女性ネットワークを読者と共有し、女性たちの生き方、働き方を具体的にバックアップしてきました。二〇〇八年には、男女共同参画社会への貢献が認められ、内閣府から「女性のチャレンジ賞」(※1)を受賞。ご自身が生き生きとした輝きの光源のような村山さんの生き方、考え方、働き方をお聞きます。

(このインタビューは、二〇〇八年九月四日に株式会社アヴァンティで行われました。)



聞き手  
津曲 陽子 (つまがり・ようこ)  
大学院人間環境学府  
行動システム専攻修士課程一年

# 女性が生き生き暮らし、働ける社会に変革すること。 地域の小さな情報誌の、社会を変える大きな力

男性と女性では

そんなに仕事の能力が

違うのでしょうか

— このたびは「女性のチャレンジ賞」の受賞、おめでとうござい  
ます。表彰状には村山さんのチャ  
レンジが「自らの意欲と能力によ  
って将来を切り拓いていくロール  
モデルとして傑出したもの」とあ  
ります。九州大学で過ごした学生  
時代から自分の仕事について目指  
すところをお持ちだったのでは  
うか。

村山 期待に添えなくて申し訳な  
く思うのですが、二十六歳の時、  
福岡で情報誌を作っている会社に  
入るまで、自分のやりたいことが  
分からず、彷徨の時代でした。大  
学を卒業したのは男女雇用機会均  
等法ができる前。「女子（就職）  
可」という会社自体が非常に少な  
い時代で、男子学生たちが次々と  
大きな会社の内定をもらっていく

のに、私は就職先が決まりませ

でした。入社したのはまだ設立し

て間もない化粧品メーカー。当時

にしては珍しく男女同一賃金とい

う点に興味を覚え、インストラク

ターとして入りました。毎日クタク

タになるまで一生懸命頑張りが

したが、心のどこかにあった「私

の可能性はまだ他にもあるのじゃ

ないか」という気持ちが膨らんで

きて、会社を三年で退職。とにか

くゆつくり考えたいという気分で

した。雇用保険も切れ、遊んでい

るわけにもいかないと、次に得た

のが福岡市の臨時職員の職。とこ

ろが、ここで非常にシヨッキング

な体験が待ち構えていたのです。

お茶くみです。約五十人の正職員

に銘々のカップがあり、この人は

ブラックコーヒー、この人はミル

クを入れるというように入れ分け

ながら、一日四回入れられるので

六人の臨時職員で手分けするので

すが、一日に二時間はお茶くみに

時間を取られます。もう一つ言う

と、正職員のなかで女性は庶務に

いる方一人でした。「男性は仕事、

女性は家事」という役割分担は、

当時は家庭の中ではまだ一般的な

光景でした。でも、社会の中で、

しかも男女平等といわれていた公

務員の職場で「男性は仕事、女性

はお茶くみ」の役割分担を目の当

たりにした時の悲しく情けない思

いは今も忘れません。男性と女性

ではそんなにも能力が違うのか、

という強烈な問いが私の中に生ま

れました。

— それがやりたいこと探しにピ

リオドを打つ転機になられた？

村山 そうだと思えます。職場の

机の上に置いてあった無料のミニ

コミ誌に目が行って、その会社の

扉を叩きました。求人募集もして

いない会社に応募するのも勇気の

いることだったのですが、それが

できたのは、大げさでなくお茶く

みをしている時のからだの震える

ような怒りのエネルギーゆえ(笑)。  
怒りのエネルギーも使いようで起  
爆剤になります。

— 村山さんのお話にも私も衝撃を

受けています。今の日本の社会は

村山さんのような方が頑張ってこ

られた結果なのですね。

## 「アヴァンティ」という思想

村山 今、津曲さんは日本社会が  
男女平等で、それが当たり前だと  
思っていますよね。でも、社会に  
出て就職する会社はおそらく社長  
も取締役も部長もほとんど男性で  
しょう。なぜなら日本の社会で女  
性管理職は十%くらいしかない  
し、部長職に至っては約二%だか  
らです。日本はまだそういう社会  
なのです。私が心配するのは、こ  
れから社会に出る女性が最初に入

(\*) 二〇〇四年から実施されており、起  
業・NPO法人での活動・地域活動等にチャ  
レンジすることによって輝いている女性個人、  
女性団体・グループを表彰し、チャレンジの  
身近なモデルを示すこと等によって男女共同  
参画社会の実現のための気運を高めることを  
目的としています。この表彰は、チャレンジ  
賞・支援賞・特別部門賞があり、毎年、男女  
共同参画社会づくり功労者表彰と合わせて、  
表彰式が行われています。

った会社の組織の作られ方を当たり前と想ってしまうこと。私にしても最初に女性がお茶くみをするようになってきている会社に入ったら、何も疑問を感じなかったかもしれない。普通に働いていると、女性も差別されているなんて思っていないし、男性はなおさらです。でも、数字は如実に差別を語っているでしょう。それを私は「おかしいな」と思うわけです。

— そこから「働く女性を応援するネットワーク型情報誌『アヴァンティ』」が生まれたのですね。  
村山 企業理念は「女性が自分の可能性を發揮し、生き生きと輝ける社会へ。社会変革の原動力になる」。そのため大事にしているのは男女平等の視点で企画・取材し、記事を書くということです。地域の小さな情報誌だけれども、その点はきっちり踏まえた雑誌づくりをしているつもりです。女性だけが家事や育児を負担するのではなく、女性が生き生きとした生き方や働き方ができる社会には変わられません。男女の社会の扱いの違い、

家庭での役割を日本だけ見て肌身で感じるのには難しいかもしれないけれど、世界に目を向けると、海外の男女平等社会の進展に気づかされます。日本も結婚しない男女や子どもを産まない働く女性が増え、少子化を招いていることに国家的な危機感を持ち、二〇二〇年までに女性の管理職を三十%にするという目標を立てています。人口減少に直面してやっと本気の男女共同参画社会づくりが緒についているように思われますが、津曲さんたちの時代にもっと大きく変えていけるように、ぜひ頑張ってくださいですね。

— 私自身、就職は大きなテーマですが、村山さんにとって仕事とは何なのでしょう。  
村山 仕事を通して自分が成長し、成熟していくのですから、仕事は生きることそのものと感じます。そして、私の成長の源は、たくさんの人との出会い。編集面のため的人物インタビューだけでなく、広告主との打ち合わせを通してドキドキするようなお話を聞けま

す。お店をつくった人が、今までどう生きてきて、なぜそんなお店をつくりたくなったのか。これからどうなりたいのか。そういう話を聞くのがとても好き。そうして私だけがドキドキするのではなく、読者のみんなにも感じてほしいという気持ちで、雑誌づくり、毎月小さな食事会やセミナー、年一回「女たちのサクセスストーリー」と題して、活躍している女性の生き方を聞くトークライブの開催などにつながっていききました。このトークライブは講演とパネルディスカッションの二本立てで、女性たちがどういう困難にぶつかって、どう乗り越えたかということをお話して、裸々に語ってもらいます。後で主演者や参加者が一堂に集う交流パーティーを開きます。人は普通、自分の真意ってあまり人に話さないものではないか。私もかつてお茶くみがおかしいと思っても誰にも言わなかったし、もっと上を目指したいのに何をしたいのか全く分からない不安や閉塞感に悩んでいることなんて周囲には打ち明け

ませんでした。でも、トークライブで出演者があまりにあっけららんと本当の思いをしゃべるので、参加者たちも普段は隠している「こうなりたい」「成長したい」という思いを話し始めるのです。それはもう自分のことを話したくてたまらなくなるという感じ。頑張っている人の話を聞いて勇気や元気をもらい、さらに自ら話すことで可能性に向かう勇気や元気がもっと大きくなるのじゃないかしら。

### 女性がもっと輝くための男女平等という視点への前進。

— そうして村山さんご自身が傑出した頑張る女性として表彰されたのですね。

村山 以前は、会社には女性を育成するという意識は希薄でしたし、育てていないから目指すべき女性先輩はごくわずかでした。そうすると、頑張ろうと考える女性が入社しても上を目指しにくいし、将来も見えてこないのです。私がい

きたのは、自分の会社には、キャリアを積んだ先輩女性はいなくても、東京ではなく、同じ福岡にこんな頑張っている人たちがいることを知って、ロールモデルにしてもらいたかったからです。ちなみに「アヴァンティ」とはイタリア語で「前進」を意味します。福岡で活躍する女性を発掘して、紹介してきましたが、今回、自分がロールモデルと評価されて、むしろ意外な気がしています（笑）。

― 将来、社会に飛び出す九州大学の学生にメッセージをいただけますか。

村山 十代、二十代の頃、「私何のために生まれてきたのだろう」「何になるんだろう」「何ができるんだろう」と考え続けていました。でも、何がしたいのかサッパリわからなくて、告白すると、私は大学時代も何となく過ごしてしまっただけです。その反省に立ってアドバイスすると、まず学生時代にサークル活動などで仲間づくりをしてほしい。それが十年、二十年后、素晴らしい人間関係に進展

する可能性があるからです。次にたくさん本を読んで幅広い知識を得ること。その人の教養は、学生時代かなりの部分が形成されるように思います。社会に出て目の前の仕事に追われるようになった時、例えば自分の専攻や将来とはあまり関係なさそうな教養課程での授業や友達とのたわいない会話がどれほど知的好奇心に満ちたものだったかを痛感する瞬間がきっとあります。広がり、深まる面白さですね。それとやはり語学力です。若い頃に外国を見て、違う価値観に触れ、衝撃を受けることが大事です。そういうことを通じて九大生には是非、社会のリーダーになってほしいですね。

― 最後に村山さんご自身の今後の目標をお聞かせください。

村山 私は十五年前に会社を作り、女性が生き生き輝いて活躍できる社会に変えたいと発言し始めました。発言しながら気がついたことですが、「私でも社会は変えられる。それは私の使命だ」と確信したのです。当時よりはずいぶん発

言しやすく、収まりよくなってきたというのが今の実感。これから日本の社会での男性と女性のあり方は大きく変わっていくと思います。女性ももっともっと活躍で

**仲間づくり、幅広い知識と教養が素晴らしい人間関係を築きます。**

きるような社会に日本がなっていくよう、十年後、二十年后も私はチャレンジしているのではないでしょう。



# 研究

## グローバルCOEプログラム

「グローバルCOEプログラム」は、文部科学省が「21世紀COEプログラム」の基本的な考え方を継承しつつ、我が国の大学院の教育研究機能を一層の充実・発展させることを目的として実施する事業です。平成二十年度に採択された二つのプログラムをご紹介します。

### マス・フォア・インダストリ教育研究拠点

拠点リーダー  
数学学研究院

若山 正人 教授



マス・フォア・インダストリ(Math-for-Industry)とは、純粋・応用数学を流動性・汎用性をもつ形に融合再編しつつ産業界からの要請に応えようとすることで生まれる、未来技術の創出基盤となる数学の新しい研究領域です。

計算機性能の飛躍的向上をみた今日、数学に対する期待が、研究開発の現場を中心に格段に高まっています。実際、近年の数学と技術の接近はかつてないほどです。以前なら、数学と技術といえば、その多くは物理学などの科学を介してようやく結びつくものでありました。ところがいまや、数学と技術は、直接的にも

互いに刺激を与えながら発展してきます。計算技法の進化や統計科学の実用はもちろんのこと、具体例を挙げて行けば、情報セキュリティと整数論、数理論ファイナンスと確率論、視覚化と幾何学の離散化など、事欠きません。このように、技術進歩に

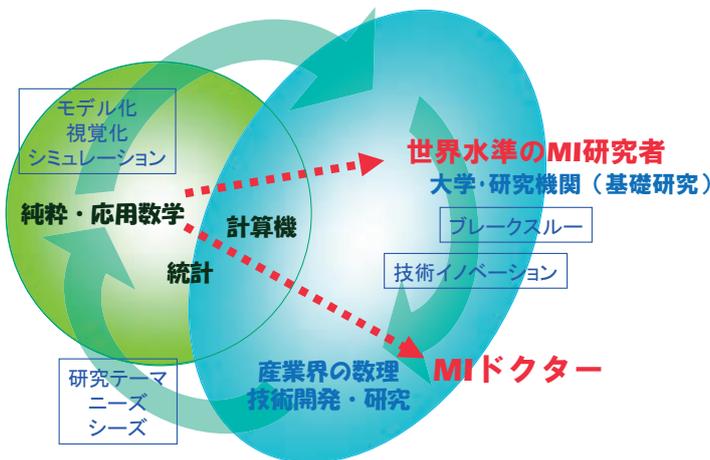
数学が不可欠となり始めた今、数学研究をこれまでの純粋数学、応用数学という枠組みで捉えていたのでは、もはや、膨らんだ期待への対応はほぼつかない状況です。また、こうした視点に立った研究活動の展開により、新たに興味深い研究テーマが芽生え、学問としての数学がさらに実り多く豊かになることも期待されま

す。

本プログラムで私たちは、理論研究におけるこれまでの実績をもとに、いまだ類を見ない数学と産業界の協働に向けた先駆的、組織的取り組みを強力に押し進め、マス・フォア・インダストリの国際的教育研究拠点を構築します。

### マス・フォア・インダストリ(MI)とは：

未来技術の創出基盤となる数学の新研究領域。



# 新炭素資源学

拠点リーダー  
先導物質化学研究所

永島 英夫 教授

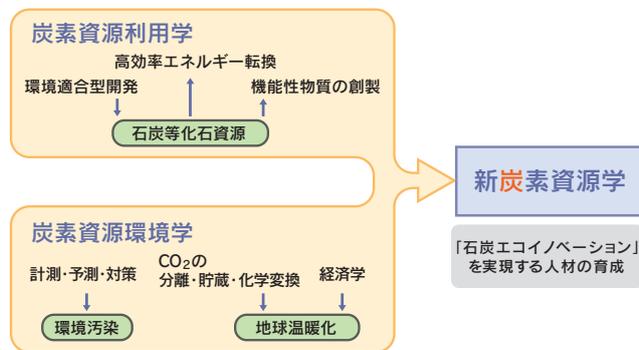


二十世紀の物質文明の原動力となつた石油を中心とする炭素資源は、現在、アジアを中心とする発展途上国の急速な経済発展に伴い深刻な資源枯渇と価格高騰を生んでいます。この問題を解決する鍵は炭素資源の多様化であり、とくに、地球上に普遍的に存在し、可採年数の長い石炭の利用はその象徴といえます。石炭の高度利用科学技術は広くバイオマス等未利用炭素資源利用へ展開可能であり、その確立は、石油、天然ガスとの効果的な役割分担を可能にし、炭素資源利用の二十一世紀型パラダイムを構築します。これに対して本拠点は、石炭利用の資源転換効率の向上、国境を越えた環境汚染防止、温暖化ガスの抑制、という難問の解決に向け、その基盤となる学問分野の開拓と若手先端研究人材の育成に取り組めます。

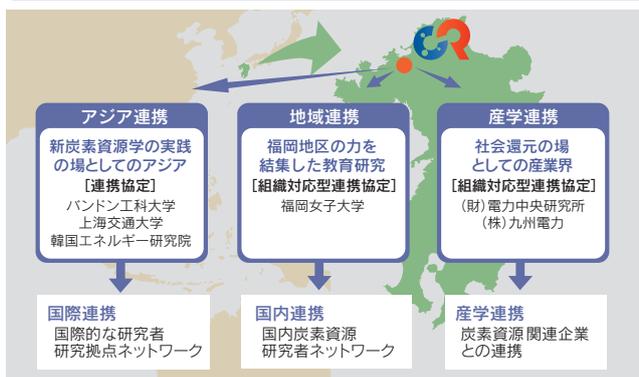
本拠点では、「炭素資源利用学」と「炭素資源環境学」という二つの学問分野に取り組みとともに、さらに、それらを連携融合することにより新しい学問分野である「新炭素資源学」を作り出し、「石炭エコイノベーション」を実現する人材を育成します。また、本拠点は、アジアに開かれた九州大学の特性と、石炭先端技術開発拠点が集中する北部九州の地の利を活用して運営します。具体的には、中国、韓国、インドネシア等の大学との双方向型研究・教育交流、福岡女子大学との連携研究・教育を行うとともに、地域企業との産学連携を推進します。教育プログラムとしては、新炭素資源学関連科目と実践的英語演習などを中心とする「新炭素資源学人材育成コース」を設置し、修士、博士の一貫教育を行います。また、「リサーチ・プロポーザル教育」、「G・

COE若手研究」、「G・COE国際シンポジウムへの参画」、「インタラクション」、「フィールドワーク」などを通じて幅広い分野で活躍する人材を育成します。

## 2つの学問分野の開拓と融合



## 地域、アジアとの連携



# 研究

産学連携の  
取り組み

## 三井造船(株)との 組織対応型 連携について

九州大学知的財産本部の推進する組織対応型連携（以下、「組織連携」という。）は、平成十五年度末から本格的に開始され平成二十年二月現在、四十一機関と組織連携契約を締結し、個別事業契約は八十七テーマを数えるに至っています。

開始当初は、共同研究をベースとする個別事業が組織連携の主体でしたが、近年、インターンシップや社会人ドクター受入れ等の人材交流も加速し、大学の研究・教育面での相乗効果も期待されています。

今回は、四年以上にわたり協力的な関係にある三井造船(株)との組織連携についてご紹介します。



図1（写真左）レーザー管ユニットと（写真右）地球深部探査船「ちきゅう」（提供 JAMSTEC）

## 掘削船のレーザー管 リエントリ自動化に関する 開発研究

巨大地震発生のしくみ、将来の地球規模の環境変動、生命の起源、新しい海底資源の解明を目的として、地球深部探査船「ちきゅう」の運用が開始されています（図1の右図）。

地球深部探査船「ちきゅう」はレーザー掘削方式を採用し（図2）、直径1・2m、長さ27mのレーザー管ユニット（図1の左図）を約百本接続することから、レーザー管全体の長さは二千五百m（最大）となります。掘削作業は数か月にも及び、海象がさまざま変化しますので、船体を海上でしっかりと位置保持する制御技術（DPS：Dynamic Positioning System）が重要となります。しかし、台風接近などには、レーザー管を海底に設置した噴出防止装置（BOP：Blow Out Preventer）から切り離し、一旦退避し、天候回復後に、レーザー管下部をBOPに再接続（リエントリー）する必要があります（図3）。このリエントリー作業は、レーザー管が長大な弾性体であることから、その海中移動時の揺れ止めは簡単ではなく、熟練技術者（海外の海底掘削会社）によって長時間をかけて実施されています。一方、これま

九州大学と三井造船(株)は、九州大学の法人化後、初めての組織連携契約を締結(平成十六年六月十四日)しました。連携テーマは「水素エネルギーの利用(CO2削減)技術の開発」、「船舶関連の要素技術の開発」、「バイオ利用技術の開発」の三本柱とし、多様な企業ニーズに対して大学シーズを提案するニーズ志向型の連携を推進しています。

個別事業契約数は、平成十六〜十九年度の連携期間において累計二十三件に上り、現在も四つの個別事業が推進されています。三井造船(株)との連携の特徴は、研究の実施期間にあります。通例では年度単位の研究目標を立てますが、テーマによっては数ヶ月単位の目標設定を行いフェーズ毎の契約を締結します。さらに契約更新のため半年毎の連携協議会を開催し、目標に対する研究成果の厳しい審議がなされます。さながら企業の開発プロジェクトのようですが同連携協議会も第九回を数え、企業と大学の文化を尊重しつつ信頼関係を構築しています。これまでの特許出願件数は十件に上り、実用化へ向けた研究開発が行われています。その中から「掘削船のレーザー管リエントリ自動化に関する開発研究」のテーマについて報告します。



図2 ライザー掘削方式 (提供 JAMSTEC)

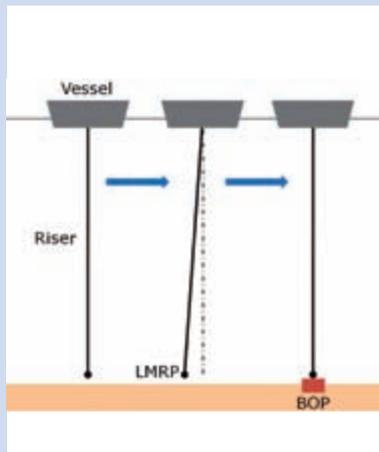


図3 ライザー管リエントリ作業

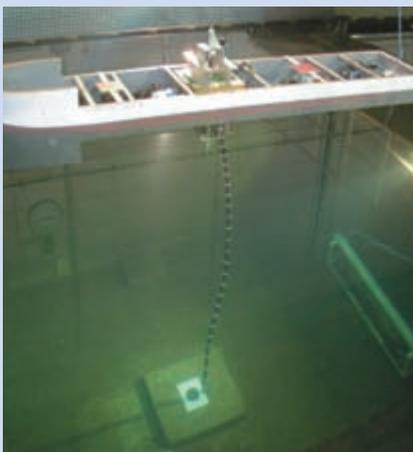


図4 模型によるリエントリ制御実験

で九州大学応用力学研究所ではレーザー管の力学モデルの研究を、また工学研究院海洋システム工学部門では海中機器制御技術の研究を、さらに三井造船(株)ではDPSの研究を行ってきた経緯があります。そこで、リエントリ作業を支援する機能を既存DPSに追加することを目的として、掘削船のレーザー管リエントリ自動化に関する共同研究を平成十七年度から実施してきました(図4)。この共同研究を通して、博士課程学生二名が関連するシーズの創出に貢献し、これに基づく関連技術二件の特許出願を行っています。この成果に基づいて、今後は、熟練技術者の養成が容易になるように、リエントリ作業の訓練シミュレータの開発を行っていく予定です。なお、本研究は「ちきゅう」を運航している独立行政法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)とは全く独立に実施されていることを付記します。

その他、三井造船(株)との組織連携では個別事業への学生の参加や数理学研究院博士課程の学生が具体的な研究テーマに取組む長期インターンシップ事業を実施するなど教育面でも寄与しています。社会貢献としての「産学連携」が「教育」、「研究」と並ぶ第三の使命として、大学の社会的責任に付加されましたが、産学連携は教育と研究の質をより一層、高める有効な手段と捉えることができます。九州大学の組織連携は、この相乗効果を検証する格好の試金石となるでしょう。

FRONT  
RUNNER

シリーズ研究

ふろんと  
ランナー

比較社会文化研究院 教授

小山内康人

おさないやすひと

# 地質学



「ふろんとランナー」は、九州大学の研究の最前線をインタビューで紹介するシリーズです。  
シリーズ第十回目は、比較社会文化研究院の小山内康人教授に、理学研究院の秋山良准教授が聞きます。

聞き手 理学研究院 秋山良 准教授

## 南極セールロンダーネ山地の岩石探査で 五億年前の超大陸、 ゴンドワナ大陸の真実を追う

### 世界に先駆けた セールロンダーネ山地調査

**秋山** 私は南極に行きたいのですが、まだ果たせないものですから、せめてもという思いで昨年出発前の小山内先生の南極の地質についてのセミナーに参加しました。南極へは何度も行かれていますね。

**小山内** 今年一月から二月にかけての調査を含めて四回になります。一回目の一九八六年当初から目的は南極・昭和基地の約六百km西のセールロンダーネ山地です。ここで約五

億年前にあったゴンドワナ超大陸に関する調査を行っています。地球の表面を構成する大地はマンツルの上に浮いており、衝突して超大陸ができるといふ理論が言われ始めたのが

一回目南極行の少し後。それまではゴンドワナ超大陸は大小の大陸が集まってできたと考えられていたのです。それが二十一世紀に入り、西ゴ

ンドワナ大陸と、東ゴンドワナ大陸が衝突してゴンドワナ超大陸ができる時に境界ができるということが想定されてきました。その境界がアフリカやマダガスカル、南極にあるとされていたのですが、しかし、現実に見た者はおらず、それを明らかにしようというのが我々の目的です。隊名をセールロンダーネ山地地質調査隊といいます。

**秋山** 境界を発見するためにセールロンダーネ山地を調査したのは、日本が初めてということですか？

**小山内** 日本が調査開始するまでは無踏査地域だったと言っていいです。

VOL  
10



南極・ドロンニングモードランドに広がるセールロンダーネ山地



南アフリカ-南極間を飛行する大型輸送機



調査地へ向かうセールロンダーネ地学調査隊 (撮影・阿部幹雄)

よう。かつてノルウェー隊がパイオニア的に調査してはいるのですが、大雑把な地質分布以外はほとんど何も明らかになっていませんでした。**秋山** 衝突境界を知る事でどんな面白さが広がる事を期待しているのでしょうか。

**小山内** 例えば、ヒマラヤ山脈はユーラシア大陸とインド亜大陸が衝突し、造山運動が起きた結果としての衝突境界です。インド亜大陸がぶつかった程度でヒマラヤができるのですから、ゴンドワナ超大陸であれば、それを上回る熱や圧力が加わり、猛烈な造山運動が起こります。セールロンダーネ山地の場合、本来ならば深さ三十kmから四十kmあたりの深さにあるマントルが採取可能な場所にあると言えます。それら岩石

を試料として採取、化学分析などを通して超大陸の分裂や成長の仕組みを解明することを狙いとしています。**秋山** 大陸衝突に関係している岩石の特徴をもう少し詳しくお願いしましょう。**小山内** 大陸同士が衝突すると片方が沈むとか、片方がの上がる、あるいは両方がの上がるという現象が起こります。多くの場合、片方がの上がるのですが、先ほども言いましたように厚さ数十kmのマントルと地殻の上がることになる。それが高い山脈になったとしても時代とともに削剥して地下数十kmにあった岩石が地表に現れるのです。岩石は鉱物の集合体ですから、鉱物の化学分析と熱力学計算によって、岩石がつくられた温度の圧力条件を決定

できます。また同位体分析から、岩石の年代を明らかにしていきます。その結果、形成温度が一〇〇℃、圧力が一三〇〇気圧で地下約四十kmでつくられた、本来なら地表では見られないはずの岩石であることが明らかになれば大陸衝突の証拠の一つを見出したことになる訳です。

### 自由な好奇心と現場主義の行動力と

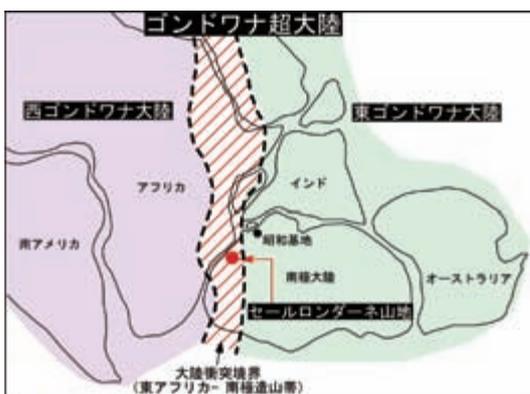
**秋山** 例えばヒマラヤ山脈は、過去に衝突があったという仮説を知っていれば目視に基づいて調査計画を立てる事ができるかもしれません。しかし、先生は例えばベトナムでの調査など、浸食を受けた結果、どこに衝突境界があるのか地形だけでは分からない所でも、試料を採集に向かわれています。お話を聞いていて不思議なのは、目視できない場所での計画をなぜ立てられ実行できるのかです。現地に行かなければ分からない事のようにも思えますが。

**小山内** そうです。基本的には資源調査を含めた現地の野外調査がすべての始まりです。今の地球上にある六つの大陸が現在の配置になるプロセスに最も大きく作用しているのはマントルで、端的に言えば、採取し

たマントル物質の物性を明らかにして、その流動性を確かめ、化学組成から現在の大陸の上にある物質がどういうマントルに由来しているか突き止めると、時代ごとの衝突、分裂というプロセスとともに、今の大陸がなぜここにあるのかということがまず明らかになります。

**秋山** 先回りするようですが、将来の予測も目的なのですか？

**小山内** おっしゃる通りです。今の大陸の配置が未来永劫続くことは決してありません。ですから、SFっぽい話に聞こえるかもしれませんが、二億年後にはオーストラリア大陸が、インドネシアの島々をなぎ倒して、フィリピン、台湾、日本をもろとも押しつぶして、ユーラシア大陸の東の端に張り付くことが想定されています。



ゴンドワナ超大陸復元図 (Jacobs & Thomas, 2003を簡略化)



聞き手：秋山良准教授

るのです。そうすると、巨大な超大陸がもう一度できることになる。アジア超大陸という名前まで想定されているですよ。その時、地球上に人類はもう存在していないでしょうけど、現時点で将来の地球環境や生命活動がどうなっているのかを、SFLレベルではあってもある程度語れるというのは一つの面白みじゃないかと思っています。

**秋山** 門外漢でも好奇心を持たずにはいられないお話ですね。小山内先生はどういうきっかけでこのような研究分野を選ばれたのですか。

**小山内** 私は都会暮らしはしているが、かなり野生児なのです（笑）。山へ行って奔放にやっているほうが性に合っている。そんな性格に気付いたのが、父親に初めて山に連れて行ってもらったとき。小学校高学年でした。山登りという行動そのものが、疲れはするがなんとも面白いことに驚嘆感激して、中学校に入ると、

周辺の山には自分で行くようになりまして。高校ではもちろん山岳部。実は学校をさぼって行ったりしていました。その結果、浪人をよぎなくされるのですが、浪人中も山に登り続けていました。それで、大学も山に関連したものを専攻したいと思うようになって、理学部の地質系に進んだのです。

**秋山** どういった山に登っていたのですか？

**小山内** 私は北海道札幌の出身なので、道内のほとんどの山は制しました。今の研究は地質への興味よりも、山が道標になって広げてくれたものかもしれないですね。ですから、地質を勉強し始めて、狙っていたのはヒマラヤ山脈の調査。日高山脈を卒業論のテーマに取り、大学院を出たらヒマラヤの調査をやるぞと密かに心を決めていました。

**秋山** 日高山脈ですか？ 実は私も小山内先生と同じ札幌の大学にいた

ことがあります。山にも登っていました。

**小山内** そうでしたか。

**秋山** しかし、日高山脈は行っていません。深く、個人ではなかなか手が出せませんでした。そういう山登りの経験は極地に行く場合も活きますでしょう。

**小山内** そうなのです。奇遇にも卒業の年にヒマラヤ山脈の調査が始まり、なんと、私の卒業を聞いた先生の中に調査チームのリーダーがいて、声をかけてくださったのです。もう意気揚々と母校の恩師に報告したら、これか思いがけずこっぴどく叱られました（笑）。まだ日高山脈でやるべきことはたくさんあるのに、ヒマラヤに行くとは、どういう生半尺な見かたなのです。性根を叩き直されまして、大学院時代はみっちり日高山脈に通い続け、おかげできちんとした基礎も含めて学ぶことができましたと思っています。そのご褒美と

いうか博士課程が終わった段階ではいろいろな研究をやっていたということになっていて、その時、また幸運にもセールロンダーネ山地の調査が始まったというわけです。

**秋山** 原点は山岳活動ということになりそうですね。また、今回の南極

行は、設営関係をはじめ様々な新しいチャレンジもあつたとお聞きしています。

**小山内** 最大のトピックスは、日本から航空機のみ的手段で南極の山岳地域に降り立ち、帰ってきたこと。日本の南極観測が始まってちょうど五十年ですが、こんなプロジェクトは全く初めてです。今までは「しらせ」といった砕氷艦で行っていました。船だと積載能力が千々くらいあつて、大量の物資を持ち込めますが、今回は航空機ということで重量制限も大きな課題になりました。

**秋山** 食糧もすべてフリーズドライだったとか。

**小山内** 基地に行くのではないので、物資の補給はできません。約三ヶ月分の食糧を持ち込むために、私自身フリーズドライの開発に携わりました。そのほか医療訓練や機械の整備訓練を受けたり、いろいろなトライがあつた隊でしたね。

**秋山** 調査地へ入ると、最大の楽しみは食事だと思いますが、フリーズドライの味はいかがでした。

**小山内** 昭和基地で越冬する調査担当隊員が非常にいい食材を使い、いろいろな料理を工夫してくれて、それを今回の南極調査に参加した比文

助教の中野君が中心になり三十五種類のフリーズドライにしたのですが、一番美味しかったのは、北海道サロマ湖のホタテにイタリア風味の味付けをしたもの。これはりっぱに商品化できるかもしれません（笑）。

**秋山** 登山や遠征時は、玄関を出る時には全行程の半分は終わったようなもの、準備が肝心ということを言いますが、今回は準備完了時点ですごく九割くらいは済んでいたという感じですか。

**小山内** おっしゃる通りの面もあるのですが、私は副隊長という立場でもあり、やはり皆を無事に日本に連れて帰るまでは終わったという感じはしなかったですね。

### 惑星科学の時代。 宇宙へ行くのに パスポートはいらない

**秋山** 今後のビジョンをお聞かせください。

**小山内** 南極調査が始まってたかだか半世紀。まだまだ分からないことがあるので、これからも調査は続けなければなりません。南極だけではなく、まだ地球そのものが持つ未知現象がたくさんあります。それを少しずつ実際に現地に行つて調査活動

をしながら明らかにしていきたいと考えています。もう一つ、アジア大陸の形成プロセスについて、これも小大陸が集合してきたので、あと五六年はプロジェクトとして続けていきます。そして一番大事なことは、将来の惑星科学に耐え得るような、若い人を育てていくことですね。

**秋山** 惑星ですか？

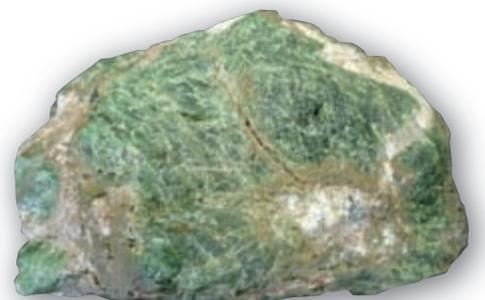
**小山内** 我々は地球科学という言葉で地学分野の研究を続けていますが、もはや惑星科学といつていい時代に突入しています。これからは太陽系などの惑星が直接ターゲットになるのです。若い人に地球だけではなく、惑星にぜひ足を運んでほしいですね。

**秋山** それも直接ということですね。  
**小山内** 直接行くべきだと思います。南極条約があつて、南極にパスポートなしで行けるように、宇宙へ行くにもパスポートはいらないのですから。調査の道に進もうとしている人が養うべきは、なによりも自然観察眼。室内のシミュレーションで自然現象はほとんど理解できるという風潮もありますが、決してそうではありません。直接見なければ分からないことはたくさんあります。そういう意味では発見はこれからも続

でしょう。先に理論があるのではなく、自然現象を把握し、その意味を明らかにするために室内実験が重要になるのです。実験室とのリンクによって、それが発見なのか、既知のものなのかはつきりします。もし発見ならば、科学を一步進めたことになるのです。発見こそが科学を発展させていくことになると思うので、学生の皆さんには自然現象をきちんと観察したり、見出す努力を続けてもらいたいですね。地質学、特に岩石学の発見は顕微鏡の中でなされることが多く、現地でこれはすざいということに出会うことはあまりないのですが、以前、セールロンダーネ山中で、緑色の大きな塊りがゴロゴロしているのを見つけて仰天したことがあります。てっきりエメラルド

だと思い、南極初の発見だと思つたのですが、調べたらゴールドマナイトという、世界的に非常に珍しいガーネットで、こちらのほうが価値が高かつたという経験もあります。

**秋山** 私も山は好きなので先生の話を聞いて、フィールドワークのない分野を選んで、少し道を誤つたのではないかという気もしてきました（笑）。小山内先生の体当たりの活躍をぜひ後進に継承してもらいたいと思います。



セールロンダーネ山産  
ゴールドマナイト（長辺役20cm）

#### 小山内康人 教授 プロフィール

北海道札幌市出身。一九八六年北海道大学大学院理学研究科博士後期課程地質学鉱物学専攻修了、福岡教育大学助教、岡山大学助教を経て二〇〇四年四月から九州大学大学院比較社会文化研究院教授、現在に至る。

これまで、一九八六年（第一八次）、八九年（第二九次）、九七年（第三九次）の三回の文部省日本南極地域観測隊員としての派遣を含め四回にわたり南極において調査・研究を行っている。専門は地質学、岩石学。



左より、小山内康人教授と、聞き手の秋山良准教授。



# 総長対談

インド工科大学ボンベイ校 学長

アシヨク・ミスラ Ashok Misra

九州大学 総長

梶山 千里

「司会進行」柳原 正治 九州大学 副学長

この対談は、二〇〇八年四月八日（火）、箱崎キャンパスの総長室で行われました。

## インド工科大学ボンベイ校との 学術交流協定。

## この新たなアジアの連携が、 世界へもたらすもの

マサチューセッツ大学という  
母校を同じくする者として

柳原 それではインド工科大学ボンベイ校のミスラ学長と九州大学梶山総長との対談を始めたいと思います。この対談では、九州大学と成長著しいインド工科大学（以

下IIT）との連携によって、アジア、ひいては世界に何をもたらすことができるのかということについて、かつて同じアメリカの大学で学ばれたお二人に話っていました。

梶山 ミスラ学長は非常にお忙しいスケジュールの中、私どもの入

学式に出席し学生を激励していただきまして大変ありがとうございました。九州大学を代表してお礼申し上げます。幸いにも学術交流協定に調印することができましたので、現実にはどういふ分野でコラボレートできるのかを確かめ、目に見える形で業績が残せるように互いの協力を強めていきたいと思えます。

**柳原** 梶山先生とミスラ学長のお二人はマサチューセッツ大学でポリマーサイエンスの学位を取られています。ミスラ学長は梶山先生の五年後に学位を取られています。当時のマサチューセッツ大学の研究環境について印象的なことをお話いただけますでしょうか。  
**梶山** 不思議なことなのですが、日本で私がマサチューセッツ大学を卒業したと言うと、殆どの人に「MITですか？」と聞かれます。「いいえ、違います」と申しますと、がっかりした顔をされるんですね。それで私は「MITは非常に優秀な私立大学です。マサチューセッツ大学は州立大学で、私が

学んでいた当時、高分子の分野では世界一の教育機関でした」と申し上げるのです。日本では一般に学生は学部を選んで進学しますが、どのような研究やどのような教授がいるか、という観点から大学を選ぶことは少ないのです。実は、私はマサチューセッツ大学のポリマーサイエンスプログラムの博士第一号です。

**柳原** ミスラ学長は、梶山先生の五年後に学位を取られたわけですが、先生がマサチューセッツ大学を選ばれた理由を教えてください。  
**ミスラ学長（以下ミスラ）** 梶山先生がおっしゃったように、マサチューセッツ大学の卒業だと申しますと私にも同じような事態が起ります。梶山先生と同じように、優れたポリマーサイエンス工學プログラムがあったのでマサチューセッツ大学を選んだのだと説明しなければなりません。私はポストンのタフツ大学で学士号を取得し、企業で一年半働いた後、マサチューセッツ大学で夜間のコースを

受講し始めました。教授陣の素晴らしさに感銘を受け、研究の質も極めて高かったことから、私は博士課程に進学することを決めました。

ポリマーサイエンス工学科は質が高いだけでなく、アメリカ人の科学者や学生、ポスドクと世界中の科学者たちが交流する素晴らしい機会を与えてくれました。

そのおかげで、今日、私はアメリカ、日本、中国、韓国、台湾、オーストラリア、フランス、ドイツ、シンガポール、そしてカナダの各国に仲間がいます。

もう一つ重要なことは、ポリマーサイエンス工学科には当時インド人の学生も他にいたのですが、博士号を取ったのは私がインド人として初めてだったということです。

さらにもう一つ、梶山先生との共通点があります。二人ともマサチューセッツ大学で学んだだけでなく、梶山先生は昨年度「優秀卒業生賞」を受賞され、そして私も実は二〇〇八年の四月十七日に同

じ賞を受賞することになっております。私の知る限り、ポリマーサイエンス工学科出身でこの賞を受けるのは二人だけ、つまり梶山先生と私ですが、二人ともアジア出身です。先生が日本人として初めて受賞され、私がインド人として初めて受賞いたします。

梶山先生と昨日話をする中で気付いたことなのですが、ポリマーサイエンス工学の博士号を取ったアジアからの三人、それは梶山先生と私、そして吉林大学の張先生ですが、その三人が共に大学の学長を現在務めています。これは本当に意義深いことではないでしょうか。

**大学は起業家精神と  
新技術を涵養する  
第一級の研究機関であれ**

**柳原** 本日、IITボンベイと九州大学との間で学術交流協定が交わされましたが、両学長のリーダーシップのもとに是非二校間の関係がさらに強まることを願っております。

IITボンベイでは幅広い分野での研究がなされていると思うのですが、IITボンベイの中で、特に強い分野あるいは外国との連携を図りたいと思う分野がございましたら教えていただけますでしょうか。

**ミスラ** 先ず何よりも、日本有数の大学の一つである九州大学と交流協定を結ぶことができ、IITボンベイとしても大変嬉しく思っております。近年の調査によりまずと、IITボンベイはインドの

# 総長対談

アシヨク・ミスラ  
×  
梶山千里

大学及び他のIIT校の中でもトップにランクされており、これは私が在任中の七年間に、研究に力点を置いた成果によるところが大きいと自負しています。六、七年前は、研究に従事する学生の数は現在の半分ほどで、六五〇人程度でしたが、現在は一、三、五〇人にまで増えています。

博士課程の卒業生もこの数年で二倍以上に増えています。世界有数の大学となるためには単に優秀な学生を擁して優れた指導を施すだけでは不十分で、第一級の研究がなされなければならないと考えています。これこそが、私が起業家精神と新技術の涵養と共に目指してきたものなのです。様々なことが起こり始めている今こそ、二校の関係を構築するまたとない機会ではないかと思っております。もう一つ、目標として実現させたいことは九州大学とのコラボレーションです。共同研究には様々な

な分野があります。例えば、教職員や博士課程の学生が交流することで、相手校が何を行っているかを知ることができません。ただ、この交流は特定の分野に限定する必要があると思っております。あまりに多岐にわたりすぎると散漫になってしまうからです。二校の力を合わせることで、世界でも最高レベルの大学に成長することが我々の目標であると考えています。

IITボンベイが得意とする分野の一つに電気工学があります。第一級の学部です。電気工学部内では、マイクロエレクトロニクス、ナノエレクトロニクスが特に伸びています。それ以外にも大変優れているのが電力工学です。電力は最近までそれほど重要視されてこなかったのですが、今や突然のブーム到来と言えましょう。他にも画像認識技術、画像処理などにIITボンベイは秀でています。コンピュータサイエンス学部も

大変優秀で、特にデータベースとストラクチャーを得意としています。そしてプロセス工学、生化学工学、土木工学といった化学工学の分野にも強みがあります。地震工学にも力を入れているところで

機械工学ではロボット工学、マイクロマシン技術、メカトロニクスなどを扱っています。

さらに、防災管理、環境工学、大気から二酸化炭素を分離する炭素隔離技術にも関心を持っており、二酸化炭素排出の全くない未来のエネルギー源を開発したいと考えています。水は我々にとって非常に重要なものですが、人口の増加につれて供給が減っている状態です。

**梶山** 九州大学も同じような状況です。ただ私どもの大学は総合大学で、人文社会系の学部を持っており、その中で「感性」を非常に大切にしています。特に芸術工学部では「感性」が学びや組織作りを初めとする全てのものに一体化されています。来年からは、ユー



ザー感性学を専門とする大学院を作ります。

また我々が特に重要視している分野は環境です。中国、東アジアの環境から我々は影響を受けざるを得ないからです。エネルギーもまた重要な分野です。我々は石炭のガス化、液化といったクリーンコールを大変得意としています。

近い将来、最も有望なエネルギーがクリーンコールです。それから十年、十五年後に非常に重要になるのが水素で、本日午後から訪問される伊都キャンパスは世界で初めて高圧のガスが扱える大学のキャンパスで、「ハイドロジョーニアス」と呼ばれる水素材料先端科学研究センターがあります。

次に来るエネルギーが核融合です。フランスではITERという核融合プロジェクトが進行中ですが、九州大学は、日本とフランスの関係機関が協力してつくった連携研究所で、日本側の代表として采配を振るっています。

**ミスラ** 素晴らしいですね。様々な協力分野があると思います。

まずはエネルギーにフォーカスした方が良いですね。昨年、我が校ではエネルギー科学工学部をスタートさせまして、今年に学部生を含めて、梶山先生がおっしゃったような人材育成を実施したいと考えています。学生は太陽エネルギー、水力エネルギー、燃料電池に重点を置いたエネルギー科学工学の学

位を目指します。石炭ガス化プロジェクトも実施しておりますので、二校が研究成果を共有できれば素晴らしいと思います。私はIITボンベイの学長だけでなく、インド最大の発電会社であるインド火力発電公社（NTPC）の役員も務めております。NTPCは火力発電からスタートして、現在は水力発電プロジェクトも実施しております、将来は地熱発電への進出も視野に入れていきます。九州には最大規模の地熱発電プロジェクトがありますので、二校がコラボレートする場合には、私が役員を務めている関係から、NTPCも参画させることが可能です。インドや日本だけでなく、世界中のエネルギー

問題を解決できるとすれば、そのインパクトは計り知れないものがあります。エネルギーには是非フォーカスしたいですね。

**梶山** 加えて申し上げたいのですが、九州大学は化学の分野でも非常に優れており、教授陣には分子機械の研究でノーベル賞候補になっている人もいます。

新キャンパス見学の際に、この研究室を訪ねていただければと思っております。

**ミスラ** 大変結構ですね。わが校のエネルギー学部は学際的な性格を持っており、化学、物理、機械工学、電気工学、電子工学、材料科学、太陽電池といった経歴を持つ人材を擁しています。また第一級の化学学部もあります。

協力したいエネルギーの分野を選んでいただいて、我が校のエネルギー

ルギー科学工学の学部長と貴校の学部長とでプログラムを策定してもらいましょう。

### 我々の研究や技術の進展には アジアの文化に基づいた アジア特有の制度が必要

**柳原** 具体的な形で共同研究の縁ができましたことを大変嬉しく思います。学生交流についても引き続き協議を行い、近いうちに合意に達することができればと思っております。

それでは最後のテーマに移りたいと思います。アジアから世界へという大きなテーマです。

インドは世界でも成長著しい国であり、特にITを始めとするインドの人材育成は大変優れていると我々は考えております。そこで、現在のインドの人材育成の現状についてミスラ先生からお話を伺えればと存じます。

**ミスラ** 先ずお話ししたのは、インドはITだけが伸びているのではなく、製造部門も成長しているということ。例えばバラッ



司会進行の柳原副学長

# 総長対談

アシヨク・ミスラ  
×  
梶山千里

トフォージという会社では自動車のクランクシャフトやアクセルの鍛造をしておりませんが、世界の需要の五十から六十%を供給しています。インドはIITだけと考えがちですが、海外と比べれば小規模とはいえ、自動車部門も成長しています。また鉄鋼部門や繊維、製薬部門も伸びてきており、IITだけではなく、数多くの製造分野で大変健闘していることを強調したいと思います。

ライアンスインダストリーズが建設した精製所ではその能力が倍加しており、単一ロケーションの精製所としては、まもなく世界最大のものとなる見込みです。なぜこういったことを申し上げるかといいますと、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリエステル、及びポリマー製品の製造においてインドは大変競争力があるということを知っていただきたいからです。需要に応えるためには、熟練した技術者や技師といった人材が必要です。

その人材につきましては、イン

ドにはおよそ一、〇〇〇の工業専門大学がありますが、グローバルな基準から俯瞰しますと、まずまずの質を備えているのはそのうちの五十校位です。そのような状態ですから、そうでない残りの大学の質を上げるのが我々の課題です。そのような大学は良い教師に恵まれないのが現状です。

もっと深刻なのは技師のレベル

でしょう。通常二年から三年の技術専門学校を卒業します。そういった学校はインドには多いのですが、何とかして質を上げなければなりません。これもまた課題ですし、多くの企業で現在実施してい

るのは社内トレーニングですが、これは抜本的な解決策とは言えません。いわば応急措置のレベルです。しかし、為すべきことは分かっていますので、とにかく策を講じているところです。

**柳原** 現在IITは七校あります。昨年、安倍前首相がインドを訪れた時、新たに計画中の三校のうち

の二校に対して、日本からの援助を受けたとインド政府から要請がありました。それを受けて、日本の大学で支援大学のコンソーシアムが作られ、九州大学もその中の一校でございます。この新しいIITに対してミスラ先生はどのような期待をお持ちであるかというところをお聞かせいただければと思います。

**ミスラ** 日本の大学がコンソーシアムを作って、インドに工科大学を新たに設立し、現在の七校からさらに数を増やそうとするアイデアは素晴らしいものだと思います。

そこで期待されるものは二種類あります。まず、先に私が申し上げた産業―特にIITや製造部門―に向けた人材を育成すること、そしてもう一つは、これはIITの経験から申し上げることですが、優秀な教育プログラムとともに、質の高い研究プログラムも最初から提供することです。当初IITは教育主体で、研究はほとんどありませんでしたが、今や研究のほうが優勢です。

ですから、新しい学校では教育と研究に同時に力を入れてほしいと思います。どちらかを長く待つというような余裕はありません。そしてIITでは社会にとって重要な問題、例えばエネルギーや水といった課題や、日本が専門知識を有する分野に深く関わっていく必要があると思います。従来分野に加えてこういった新しいものを取り入れることは大賛成です。

また、IITにおいては全人教育に力を入れています。人文科学や社会学部も大変秀れています。経済学や哲学といった個別の学部



インド工科大学ボンベイ校 ミスラ学長

はありませんが、一つの学部内に心理学、社会学、哲学、サンスクリット、英文学といった個別の分野を指導する教員が四名から六名います。九州大学も人文科学に強く、技術と社会科学を組み合わせた学際的なアプローチをとっていらっしゃると思います。先ほど梶山先生がおっしゃった「感性」が極めて重要であると私どもも考えています。

我が校には経営学大学院もありまして、通常の経営管理に加えて、起業家精神や知的所有権などについても学びます。ビジネススクールではありますが、M I T のスローン経営学大学院のように、技術管理といった分野に重点を置いております。

**柳原** 日本の大学が新しいI I T に関わっていくということは、アジアの大学の中での連携を進めていく上でも非常に大きな意味があるかと思いますが。九州大学はアジア指向を国際戦略の基本に据えておりますので、I I T の計画にも合致していると思うのですが、



九州大学 梶山総長

だいぶ前から「アジア・スタンダード」を主張されている梶山先生に、この点につきまして少し説明をいただければと存じます。

**梶山** アジアでしかできないことはたくさんあると思うのです。例えばモンゴロイドのDNA に関わる学問はアジアでしかできません。また風邪薬を作る場合でも、アジアではモンゴロイドの遺伝子型に適した薬を処方できます。こういったアジアに特有の薬を開発するということは、「アジア・スタンダード」の一例と言えましょう。それからもう一つ、例えば技術士の資格はアメリカやヨーロッパでは確立しているのですが、アジアでは、制度自体は存在するものの、基本的な考えは西洋からそのまま

移してきたものですから、アジアの文化に密着していません。「アジア・スタンダード」に基づいた特有の制度を作らねばならないと思うのです。

**ミスラ** 梶山先生が重要な事を提起されましたが、それにつきましても同感です。アメリカはずっと日本、インド、中国、そして韓国と交流を続けてきており、アメリカについては研究を初めとする様々な事柄に対して私は大いに敬意を払っておりますが、アジアの問題はアジアで協力して解決すべき時に来ているのではないかと思えます。アジアには独自の伝統的価値観や芸術、意匠があるわけですから。こういったものは守ろうとしなければ、消えてしまいます。しかし、協力して効果的に歴史的遺産を保護することは可能だと思えるのです。

**梶山** 文化や宗教といった括りでの国を分類するのは難しいのですが、インド、東アジア、東南アジアでは米を主食としています。米の文化圏であるという共通点を軸に、

様々な協力をするための方法を見つけていくことが重要だと思えます。

**ミスラ** そのとおりですね。もう一つの協力分野として、是非考慮いただきたいものがあります。難題であり、かつ大きなチャンスにもなるようなものですが、例えば我々が支援しているカンボジア工科大学のように、国と学校を選んで教育の質を高めるといような活動です。ベトナムでも、インドネシアでも、あるいはカンボジアでもよいのですが、こういった国々を支援できる立場に我々はあると思うのです。これらの国の大学や技術専門学校のレベルが上がれば、我々全員がメリットを享受できると思っております。

### さらに強固で緊密な大学の アジアネットワークを

**梶山** そのためにはアジアの大学のネットワークを作る必要があります。私どもが二〇〇〇年から行っているアジア学長会議は、アジアの大学のネットワーク作りと協

# 総長対談

アシヨク・ミスラ  
×  
梶山千里

力体制に非常に有効なものです。今年には台湾大学で開催されますが、一去年は上海交通大学で開催され、その前が九州大学、そして五年前はチュロンコン大学で開催されました。このような会議を主催することによって、例えばカンボジアの大学においてもネットワーク作りができると思うのです。

**ミスラ** ええ、強力なコラボレーションが可能という点ではおっしゃるとおりだと思います。しかし

今名前が挙がった大学、つまり上海交通大学などの大学はすでに高いレベルにあります。そういった大学は、あまり恵まれていない他の工業系の大学を無視しているかもしくは考慮していないというのが現状です。カンボジアの大学はまだ高いレベルにはありません。そういった大学の底上げをして、我々のレベルにまで上がってもらわなければなりません。レベルに到達していないという点において、先生が挙げられた大学とは全く違う状況なのです。

**梶山** ですから、高いレベルの大

学のネットワークを、まだその域に達していない大学のレベルアップに使うことができるのですよ。  
**ミスラ** そうですね。そうでない大学のレベルを上げること、全ての大学がメリットを得られますからね。

**柳原** 九州大学が個別に進めているプログラムがいくつかございまして、一つにはJICAとJBICの協力を得て、東インドネシアにありますハサヌディン大学の工学部の支援を行っています。

また、去年新しくバンコクに作られた泰日工業大学がございます。それから、マレーシアに日本型の大学を作るというプロジェクトもあります。

**梶山** アジアを超えてエジプトでのプロジェクトもあります。このプロジェクトのために、一週間前、私はエジプトにりました。

**柳原** 個々のプロジェクトにIITボンベイの力を借りながら、協

働してアジアの大学のレベルアップをしていくというのは大変意義深いことだと思います。

**ミスラ** 本当にそうですね。喜んで協力させていただきます。

**梶山** 様々なプロジェクトで協働ができると思いますが、私が実現したいのは、IITボンベイ、吉林大学、そして九州大学のコラボレーションです。三校の学長は全員マサチューセッツ大学のポリマーサイエンスの卒業生ですからね。  
**ミスラ** いいですね、是非やりましょう。

**柳原** 本日の対談で、色々な形でコラボレーションができるということがよく分かりました。

**梶山** 本日はミスラ学長から非常に幅広い内容のお話を頂き、IITボンベイの得意とする分野について詳しく知ることができました。IITボンベイとどのような分野で協力をスタートさせたら良いかということについても明確で現実

的なイメージが得られました。近いうちに是非実現させたいと思いますが、あまりにコラボレートできる分野がたくさんありますので、少し絞りたいと考えています。  
**柳原** ミスラ学長、本日はありがとうございました。  
**ミスラ** こちらこそありがとうございます。ありがとうございました。素晴らしい対談でした。



対談を終えて（左から）梶山千里総長、インド工科大学ボンベイ校ミスラ学長、柳原副学長。

## 次期総長に有川節夫理事

平成二十年七月十一日（金）、九州大学総長選考会議は、次期総長候補者に、有川節夫（ありかわ・せつお）九州大学理事・副学長を決定しました。

この日、記者会見に臨んだ有川理事・副学長は「本日、次期総長候補者に出され、身が引き締まる思いだ。自分の持つ全ての力で、母校九州大学の発展のために尽くしたい。九州大学の総長は、責任の重い立場。他大学との競争の一方で九州全体のまとめ役も期待される。第一の課題は部局の活性化。部局のビジョンに基づき創意工夫のお手伝いだ。法人の長としてのリーダーシップを発揮しつつ、教員の自由な発想を生かしてポトムアップを図る。皆が元気になる九州大学づくりを目指したい。」と述べました。



有川節夫理事・副学長は鹿児島県出身。専門は情報科学。次期総長の任期は、平成二十年十月一日から平成二十六年九月三十日までの六年間（再任不可）です。

## 法学部卒業生の桜井龍子さんが最高裁判事



平成二十年九月十一日（木）、九州大学法学部卒業の桜井龍子（旧姓・藤井）さんが、最高裁判所判事に任命され、十五人の最高裁判事の中で唯一の女性、初の戦後生まれの判事となりました。

桜井さんは、九州大学法学部卒業後、労働省へ入省。婦人福祉課長、大阪府生活文化部部长、労働大臣官房審議官を経て、労働省女性局長、内閣府情報公開審査会委員など、数々の行政の現場で活躍してきました。

また、平成十六年四月からは、九州大学の経営協議会委員も務めました。

## 国公私の大大学で共同シンポジウム

平成二十年九月三日（水）、アクロス福岡で、九州大学・福岡女子大学・西南学院大学による国公私大大学共同シンポジウム「福岡から考える環境問題」が開催されました。

今回のシンポジウムは今年四月に締結された三大学連携協定に基づき開催されたもので、九州大学の楠田哲也名誉教授、福岡女子大学の馬昌珍准教授、西南学院大学の岩間徹教授、東京大学の山形俊男教授による発表やパネルディスカッションが行われました。



環境問題の現状を踏まえつつ、「福岡」から発信できること、福岡にある大学として連携して行えることなどについて、共に考える機会となりました。

## オープンキャンパスに二万五千人

二〇〇八年の九州大学オープンキャンパスは、八月七日（木）が文系と二十一世紀プログラムを対象に、八日（金）が理系と二十一世紀プログラムを対象に開催されました。

初日の七日は、朝早くから、貸し切りバスなどで制服姿の高校生たちが箱崎キャンパスに入構し、志望する学部の説明会場へと向かっていました。

文系講義棟内に設けられた教育学部の説明会場では、学生たちが、自主製作した「九大生の日」を紹介する映像を流したり、各県の高校に関するクイズをしたりしながら、学

部の特徴や魅力を、訪れた高校生にアピールしていました。

二日目の八日には伊都キャンパスでも開催され、高校生たちは、伊都キャンパスの最新の実験設備をめぐる研究室見学ツアーに参加するなど、最先端の九州大学の教育・研究に触れました。

また、各学科・コース毎に設けられた在学生との懇談コーナーでは、先輩学生と就学・研究内容やキャンパスライフ等について、親しく懇談する高校生の姿が見られました。



## アントレプレナーシップシンポジウム

Vision of Entrepreneurial Success

「世界を目指す起業家を九州から」開催

平成二十年八月二日（土）、西日本新聞会館国際ホールにおいて、アントレプレナーシップシンポジウム「Vision of Entrepreneurial Success」世界を目指す起業家を九州から」が九州大学ビジネス・スクール（QBS）と九州大学知的財産本部の主催、九州産業経済局とQBS同窓会の後援で開催されました。

設立から六年目のQBSは、様々な分野で修了生の活躍が見られ、修了生や現役生による起業は、すでに十数社を数えます。

今回のシンポジウムは、九州大学を卒業の後、アメリカの大学院で勉強され、シリコンバレーで創業のIT企業で大成をおさめられたロバート・ファン氏（SYNEX Corp. CEO）より、QBSおよび九大発のアントレプレナーをサポートすべく、多額のご寄付をいただくことになり、これからのアントレプレナー支援の始まりとして、開催されたものです。

当日会場では、二〇〇人近い参加者が、ロバート・ファン氏をはじめとした講演者の熱いメッセージをしっかりと受け止めていました。



講演するロバート・ファン氏

## ウォーキングツアーで糸島を散策

平成二十年九月十二日（金）、伊都キャンパスがある「いとしま」の歴史、文化、伝統、自然など豊かな地域資源について学び、その魅力を体感することを目的としたタウン・オン・キャンパスまちづくり推進会議主催の「いとしまウォーキングツアー」があり、教職員、学生、地元自治体職員、一般市民の約三十名が参加しました。

ツアーに参加した一行は、前原市にある伊都国歴史博物館で、「いとしま」の歴史について、平原遺跡から出土した日本最大の銅鏡「内行花文鏡」などの展示物を見学しながら学びました。その後一行は、ツアーの目的地である高祖神社（前原市）を目指しました。途中、怡土城址の土塁を見学し、高祖神社到着後は、同神社の歴史と毎年奉納されている夜神楽についての説明を受けました。初めて高祖神社を訪れた参加者からは、「夜神楽を見てみたい」との声が聞こえました。



## イノベーション人材養成センターが開所

平成二十年八月十八日（月）、平成二十年度文部科学省科学技術振興調整費「イノベーション創出若手人材養成プログラム」の採択に伴う「イノベーション人材養成センター」の開所式が文部科学省、科学技術振興機構、協働企業、九州・山口地区国立大学法人及び本学から関係者出席のもと、創立五十周年記念講堂で行われました。

本センターでは、これまでのキャリア支援センターの実績を基盤に、博士人材を対象に国内外の企業と本学及び九州・山口地区国立大学法人が協働して、国内外企業研修（異業種）、産学共同研究企画（異分野）、国際交流研修（異文化）等のオンザジョブトレーニングを行います。これを通じて、高い志を持ち、高度な研究開発能力、国際性及びリーダーシップを身につけ、かつ、産業界で活躍できる卓越した研究開発リーダー候補者を養成することを目的としています。

開所式に引き続き、旧工学部大講義室において「産学連携教育による博士人材育成の展望」をテーマとしたイノ



開所式に引き続き行われた、イノベーション人材養成セミナーの様

ベーション人材養成セミナーを行い、文部科学省、企業、大学のそれぞれの立場から博士人材に対する現状認識並びに本事業への期待がパネリストから述べられ、活発な意見が交わされました。

# 同窓会の話題

## 平成二十年 東京同窓会ビアパーティー



挨拶を述べる岡部東京同窓会会長

マンドリンクラブOBによる演奏

平成二十年八月十八日(月)午後六時。学士会館大ホールに約三五〇名(新記録)の参加者が集う中、マンドリンクラブOB十名による旅愁を主題とする変奏曲などの演奏でパーティーが始まりました。

最初の岡部会長の挨拶では、法人化・競争時代の大学運営における同窓会の存在意義などについてスピーチされ、九月末で任期を終えられる梶山総長への感謝が述べられました。続いて、梶山総長からご在任中(平成十三年から七年間)の大学改革と大学の現況などについてご報告をいただきました。

今回も大学から有川、柴田、小寺山、村上理事・副学長、松元理事・事務局長、落合副学長、渡邊総務部長他関係部課の方々にご出席いただきました。次期総長に選出された有川理事・副学長には宴会中になりましたがご挨拶いただきました。の  
本山副会長(関東千子会会長)の

ご発声による乾杯で開宴となり、直ちに賑やかな懇談が始まりました。当日は平成卒の七十一名が参加され、女性も多く、華やきました。

今回もアサヒビール池田会長から瓶ビール六十本をご寄贈いただきました。

終盤のコールアカデミーOBのミニコンサートでは三十六名のOBが琵琶湖周航歌などを歌い、野ぼらの演奏では荒谷俊治参与(二十八年法卒、日本指揮者協会会長、コールアカデミー創設者)が指揮を執られました。

ミニコンサートに続き、参加者全員での「松原に」斉唱では梶山総長、岡部会長もコールアカデミー会員とともに壇上に上がられ、声高く歌われました。

荒谷参与の閉会の辞の後、沖田理事により、大学の発展、創立百周年記念事業の成功などを祈念した力強い三本締めで夏の宴を閉じました。

梶山総長には東京同窓会の設立からその後の運営について何かと格別のご高配を頂き感謝申し上げます。この度、大勢のご参加を得て、梶山総長をお送りするに相応しいパーティーになりました。

平成二十年八月二十一日

東京同窓会理事長・事務局長

田坂 和義



コールアカデミーOBによるミニコンサート



# 九大生が案内する 世界のキャンパス

交換留学先 **Université Michel de Montaigne Bordeaux 3**  
**ボルドー第三大学**



文学部 4年

**井上 祥子** いのうえ しょうこ

ラグビーW杯日加戦

私は平成十九年の九月から、フランスのボルドー第三大学に八ヶ月間留学しました。留学を志したのは、本国フランスで自分の専門分野であるフランス文学の勉強をしたい、多くの文学作品を生み、育んできたフランスの文化を直に体験したいという思いからでした。

留学したての頃、フランス人の学生に混じって授業についていくことはとても大変でした。しかし、授業には欠かさず出席していたので、徐々に授業のフランス語が聞き取れるようになり授業が面白くなってきました。またアジア系の学生は珍しいためか、毎回出席していると、先生も私の顔を覚えてくれて、色々と気遣い声をかけてくれるようになりました。

また、私がボルドーで得たかけがえのないものは、ここでしか出会うことのできなかつたであろう、たくさんの方の友人達です。授業の空き時間はいつも、日本語学科に所属しているフランス人の友達とカフェテリアでお互いに教え合ったり、文章を添削したりして過ごしました。友人の一人が「ボルドーの人達は、よく知らない人に対しては距離をおくけれど、仲良くなると親身になって接するし、温かい」と言っていました。言った本人もボルドーの人なのですが、実にそのとおりでと思います。こちらから思い切って声をかければ、いつでも、みんな親切に助けてくれました。

世界遺産に登録された美しいボルドーの街並、日本語学科の院生と立ち上げたチューター活動、友人宅でパーティーをしながら迎えた新年、様々な国の人が住む寮、すべてが大切な思い出です。

## 大学情報

Université Michel de Montaigne Bordeaux 3



カンコンス広場

一四四一年創立の歴史ある総合大学。理学・工学系の第一、医学・保健学系の第二、人文学系の第三、法学・経済学系の第四に分かれている。公務員などを養成する機関 (Science Po) や外国人のためのフランス語学校 (DEFL E) などが併設されている点の特徴。なお、留学生も一部の授業が受講できる。また赤ワインの代名詞でもあるその名にふさわしく、理系の中には醸造学という研究分野があり大学所有の葡萄畑もある。ボルドーの中心街からキャンパスまでは路面電車が通っており、アクセスがよい。

ボルドー市はフランス西南部にあるアキテーヌ地域圏の中心都市。福岡市の姉妹都市でもある。ワイン貿易で成した富をもとに築かれた美しい街並は二〇〇七年世界遺産に登録された。人文思想家モンテーニュ(ボルドー第三大学に彼の名が冠されている)、政治思想家モンテスキュー、小説家モーリヤックを輩出した土地でもあり、豊かな文化資産を誇る。

## 『北大・九大 合同フロンティア・セミナー』 を開催します

九州大学と北海道大学は現在、両大学がどのような研究をすすめているのか等について広く産業界、社会人、両大学のOB・OGの皆さんに知っていただき、各分野の方々との連携を一層深めることを目的として、『北大・九大 合同フロンティア・セミナー』を開催いたします。

合同フロンティア・セミナーでは、南北の知の拠点である九州大学と北海道大学における先駆的な取り組みと活動状況を社会に向けて積極的かつ継続的に発信することにより、両大学が更なる交流を深め、互いに切磋琢磨しながら連携協力を行い、今後の両大学の発展につながっていくものと考えています。

第1回は【産学連携】を、第2回は【観光による地域マネジメント】をテーマに、下記により開催します。



### 【第1回】 テーマ「産学連携」

入場無料

**日時** 平成20年10月24日(金) 18時30分から

**場所** 品川プリンスホテル (東京都港区高輪4-10-30)

講師：宮下和夫 (北海道大学大学院水産科学研究院 教授)

【海藻油によるメタボリックシンドローム予防】

古川 浩 (九州大学大学院システム情報科学研究院 准教授)

【真のユビキタス社会を実現するブロードバンド無線通信への挑戦】

### 【第2回】 テーマ「観光による地域マネジメント」

入場無料

**日時** 平成21年2月13日(金) 17時30分から

**場所** 東京ミッドタウン・デザインハブ  
インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

(東京都港区赤坂9-7-1)

講師：西山徳明 (九州大学大学院芸術工学研究院 教授)

「ヘリテージ・ツーリズムによる地域マネジメントの実践」

敷田麻美 (北海道大学観光学高等研究センター教授)

「エコツーリズムから地域マネジメントへの挑戦」

問合せ先

九州大学企画部研究戦略課

TEL : 092-642-7265 FAX : 092-642-7090 E-mail : kissen@jimu.kyushu-u.ac.jp

# 伊都祭2008

“きちやってんしゃい!伊都キャンパス～地球を守れ!糸島環境サミット～”

伊都キャンパスで、本学、地域住民が一体となり、大学・地域の魅力を発信する祭り「伊都祭」を開催します。

今年は「環境」をテーマに、伊都祭を通じ「環境」について共に考えたいと思います。また、本学の研究活動や各種取り組みの展示だけでなく、伊都キャンパス周辺地域の特産物の販売、地域の伝統芸能などの発表があります。



**開催日** 11月1日(土) 10時～16時

**場所** 九州大学伊都キャンパス

※詳しくは、伊都祭実行委員会ホームページ(<http://itosai.web.fc2.com>)をご覧ください。

問合せ先

同祭実行委員会事務局 (九州大学伊都地区共通事務室内)  
TEL : 092(802)2445

# ホームカミングデー2008

第3回九州大学ホームカミングデー



上:旧六本松本館

下:昭和34年頃の六本松正門と本館

第3回九州大学ホームカミングデーを平成20年11月22日(土)に開催します。

ホームカミングデーは、卒業生の皆様に年に一度大学のキャンパスへ足を運んでいただくという九州大学の企画です。

今回は、来年4月に移転する「六本松」をテーマに各種イベントを企画しています。

当日は、学園祭の開催期間中です。この機会に、懐かしい旧友やご家族とのひと時を思い出の六本松キャンパスで過ごされてみてはいかがでしょうか。

**開催日** 平成20年11月22日(土)

**場所** 六本松キャンパス (福岡市中央区六本松4-2-1)

※ホームカミングデーの様様をホームページに掲載しています。

<http://www.kyushu-u.ac.jp/> [検索枠に“ホームカミング”と入力してください]

実施予定行事

- 九大写真展及び絵画展～六本松キャンパスの歩み～
- 六本松をテーマにした講演会
- 懐かしの学食メニュー
- キャンパスツアー in 伊都

今年度の実施事業は、順次ホームページ等でお知らせする予定です。

問合せ先

九州大学総務部総務課 九州大学同窓会連合会担当  
TEL : 092-642-4328 FAX : 092-642-2113 E-mail : [alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp](mailto:alum.uok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp)

## 6月

わたしを語る 海の生き物たちに魅せられて 菊池泰二名誉教授  
(熊本毎日 6/1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24)

フアントム事件 継承を「墜落四十年 九大でシンポジウム」  
(西日本 毎日 佐賀 大分合同 宮崎毎日 日本 6/1)

「身体と心 健康は循環」よみうり市民講義 中野元九大名誉教授語る  
(読売 6/1)

医療シンポジウム「心の病の原因と治療—もう我慢しなくていいのです—」  
(九州大病院長)

(日経 6/3)

相良氏開拓の軍用山道 (人吉一八代)「殿様道」歩き学ぶ  
九大生や地元愛好家  
かまで切り開き 往復八キロ  
(熊本毎日 6/3)

ドライマウス 症状と治療法  
中村誠司歯学研究院教授  
(読売 6/3)

治験ネットワーク福岡  
九大で設立記念式典  
(日経 6/3)

「景 空から」十二の箱「写真展  
九州大学病院一階  
「釜掛けの松」ギャラリー  
(読売 6/3, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24, 25)

九州大などの国際交流支援  
文部科学省  
(西日本 6/4)

HPで店舗紹介 制作担当は地元九大生 清掃活動など計画  
(西日本 6/5)

本紙掲載写真企画  
九大病院で作品展  
(読売 6/5, 7)

国境越える環境問題テーマにフォーラム あす九大筑紫キャンパス  
(西日本 6/5)

『モノから見た海域アジア史』四日市康博編著 九州大学出版会  
(朝日 6/6)

ピンポイント 研究成果を社会還元  
谷川徹知の財産本部副本部長  
(毎日 6/6)

ひと「トキ再生」のプロジェクト代表を務める 島谷幸宏工学研究院教授  
(西日本 6/6)

時評小説 存在の根っこを問う  
松本常彦比較社会文化研究院教授  
(読売 6/6)

九大フィルハーモニーオーケストラ  
第一八〇回定期演奏会  
(読売 6/7)

学生向けフリーペーパー  
九大・西南大生ら創刊  
生涯福岡人 地元の企業紹介  
(読売 6/7)

ハマグリ漁復活 生活排水浄化、乱獲防止 漁獲四年で十二倍  
(西日本 6/7)

干潟で何が起きているか  
小池裕子比較社会文化研究院教授  
(西日本 6/8)

三池労組機関紙HP公開  
九大研究班がデータベース化  
(読売 6/8)

九大高度先端医療センター開設五年  
治験活発、地道に実績  
(読売 6/8)

九大スターフライヤーと連携  
デザインで共同研究  
(日経 読売 西日本 6/11)

「感性」テーマに 九大が公開講座  
福岡市で十三日から  
(西日本 6/11)

きよの健康 「増える若者のうつ」  
神庭重信医学研究院教授  
(日経 6/12)

講演「ハンセン病と人権」  
内田博文法文学研究院教授  
(朝日 6/13)

さまざま文化施設  
九大に全国初のHME養成コース  
(毎日 6/14)

ステント治療 副作用少なく  
九大病院、ナノテクで開発  
(西日本 6/15)

ナノチューブで配線  
九大、導電性を高く  
(6/16)

九大フィルがあす定期講演会  
(西日本 6/17)

ビタミンA 取りすぎると？ 胃ガンに？ 九大調査「栄養素もバランスを」  
(朝日 6/17)

九州大学 ビジネス戦略後押し  
人のネットワーク重視  
(日刊 6/17)

じん肺訴訟記録公開へ  
九大資料館「筑豊の失敗、学んで」  
(朝日 6/18)

感染症指定の引き継ぎ養成  
九大病院に福岡市  
(西日本 6/19)

こども病院感染症指定医巡り福岡市  
辞退方針九大に説明  
代替施設の協議開始  
(朝日 6/19)

二十三日からイスラムウィーク  
講演や学理で文化紹介  
九大留学生ら モスク建設控え  
(西日本 6/19)

第八回九州大病院別府先進医療センター市民公開講座  
(朝日 6/19, 20)

九大の歴史的建造物残せ  
箱崎キャンパス跡地利用 地元住民・福岡市など 有効活用へ提言や調査  
(日経 6/19)

玄海町・九州大薬草研究施設  
温室など十一棟整備  
事業費十億円 核燃料交付金活用  
(佐賀 6/20)

六本松の九大跡地を考えるシンポジウム・パートII〜九大図書館を知の遺産としてつなぐ  
(読売 6/20)

九大発ベンチャー企業設立  
液体ヘリウムを使わずに超低温を作り出す希釈冷凍機を開発  
(科学新聞 6/20)

現代ストレスと心の病を考える  
きよの福岡市でシンポジウム  
九州大病院長ら討論  
(西日本 6/21)

呼子のイカ直産 最終実験  
唐津市と九大が来月実施  
生きたまま、横浜の料理店に  
(西日本 6/21)

地域の安全を守る「防人」  
島原半島② 清水洋附属地震火山観測研究センター長  
(毎日 6/21)

田中良の九大教授「骨が語る古代の家族」出版家父長に至る親族構造  
(毎日 6/21)

考古学マンスリー 九州大学考古学研究室五十周年の「知命」とはなにか  
(西日本 6/21)

アジアの人材獲得へ 九大、大連で一般入試ビジネス・スクール  
(西日本 6/21)

九州産衛星発射秒読み  
九大・九工大など  
二〇〇九、二〇一〇年目標開発着々  
(西日本 6/21)

コーンスूपル牛乳+たくあん  
味覚の不思議数値で解明  
都甲九大大学院教授が公開講座  
(佐賀 6/22)

「心と体は密接に関係」福岡市で医療シンポジウム  
(西日本 6/22)

九大跡地活用考えるシンポジウム  
きよの六本松で  
(西日本 毎日 6/22, 23)

「隠れ九大生」探したい  
北京は宮崎幹事長 橋口博州さん  
(西日本 6/23)

NPO草の根ひとトーク  
「九州大学 ころんとそだちの相談室」  
気軽に相談できるよう  
(西日本 6/23)

座談会 わたしたちの九州  
溝越明九州大学客員教授  
(西日本 6/23)

中学生向け科学実験教室  
九州大大学院システム情報科学研究  
(読売 6/24)

研究室を歩く  
日本でカックロール生産を  
九州大園芸学、栄養化学研究室  
(読売 6/24)

南区で防災セミナー  
九州大大学院工学研究員の橋本晴行  
准教授が講演  
(読売 6/24)

ふんどし学生 六本松に別れ  
九大田島寮五十五年の歴史に幕  
来週キャンパス移転  
(西日本 毎日 6/24, 27)

日本癌学会・市民公開講座  
飯田三雄医学研究院教授  
(朝日 6/25)

久保千春 九大新病院長に聞く  
久産期医療やがん治療  
地域機関との連携強く  
(朝日 6/25)

九大学長選様変わり  
ネットで動画演説  
活発に学内説明会  
(西日本 6/26)

採血器調査後も使い回し  
大分の九大施設 県に報告遅れる  
(読売 毎日 朝日 6/27, 28)

私の視点 九州大教授 柳原正治  
日中ガース田合意  
将来、日本に有利な材料  
(毎日 6/27)

九州大応用力学研究所  
次代エネルギー実現に期待  
高温高圧プラズマ装置点火式  
(毎日 西日本 朝日 6/27)

「アジア考古学の拠点に」  
九大研究室が50周年記念講演  
(読売6/27)

美術批評! 思想を伝えるデザイン  
「エンツォ・マリー」展  
池田美奈子芸術工学研究院准教授  
(朝日6/27)

大阪市北区で「九大大阪オフィス」を  
開設  
(日刊工6/27)

地域の救急 飛躍へ期待  
九大病院へリポート開設へ  
(日経6/28)

育て公共ホールの担い人  
九州大大学院教育プログラム開講  
(読売6/28)

農漁業好き 九大育成中  
搾乳・田植え・養殖…体験講座  
(朝日6/28)

アルツハイマー病治療 最前線  
吉良潤一医学研究院教授  
(読売6/28)

わしたちの九州 地道な調査報道  
期待 篠崎彰彦経済学研究院教授  
(西日本6/28)

第五回日本うつ病学会総会  
テーマ:現代のうつ病  
神経重信医学研究院教授  
(朝日6/29)

九大がダイハツ九州の開発拠点を伊  
都キャンパス近くに誘致 開発拠点  
の充実が鍵に  
(西日本6/29)

# 7月

「QUEST」稼働  
プラズマ維持研究 九州大が本格化  
(日刊工7/1)

福岡、釜山両市の魅力向上へ  
九大と東工大共同研究  
(西日本7/2)

五百十一施設二十一自治体で確認  
採血器具使い回し  
県内、九大病院なども  
(西日本、日経、読売、朝日7/2)

チヨウ異変北へ 温暖化影響  
矢田脩比較社会文化研究院教授  
(西日本7/2)

九大田島寮 有終の樽神輿  
来春閉鎖、五日披露  
(読売7/3)

星くずに太陽系の秘密  
NASAが採取 九大で研究  
(朝日7/3)

福岡市の二市立病院整備問題  
連携重要、情報交換密に  
久保・九大病院長に聞く  
(西日本7/3)

九大長選「投票結果尊重を」 「あく  
まで参考」一週間後に選考会議  
(西日本7/4)

九大院生ら萩での手法  
伝授「ヨルダンで地域おこし  
(西日本7/4)

九大同窓会設立総会  
十八日 興産ビル  
(宇部日報7/4、15)

時評 小説 活字の力再考しよう  
松本常彦比較社会文化研究院教授  
(読売7/4)

超短波 九州大学大学院・  
自然保全研究室 アカウミガメ  
(西日本7/4)

留学生と楽しく会話を 九大伊都  
キャンパス 毎週金曜に交流サークル  
(朝日7/4)

環境技術でアジア支援  
鶴野伊津志応用力学研究所教授  
(西日本7/4)

警固断層地下から監視  
九大が高感度地震計設置  
(西日本7/5)

九大オフィス 大阪でも開設  
(朝日7/5)

九大ファイル 重厚な調べ 百八十回  
目の定期演奏会千六百人うっとり  
(読売7/5)

神輿担ぎ、寮よさらば 九大大生  
(朝日、西日本、日経、毎日、読売、大分合同、  
南海日日、沖縄タイムス7/6、8)

AO入試廃止の動き 大学生集めに有  
効だが…「橋など」学力不足  
(日経7/7)

福祉NPO 活動十年  
九州大研究院 安立清史准教授に聞く  
(西日本7/7)

九大で公開講座  
「社会を支える機械工学II」  
(読売7/8)

気候変動 微粒子から探る  
九州大応用力学研究所  
(読売7/8)

九州大、新素材を開発 海上発電所  
実現に道  
(沖縄タイムス、大分合同、熊本日日、南日本、毎日、  
朝日、佐賀、山口7/8、9、12、21)

発信機付けたウミガメ産卵  
九大研究室が追跡中  
(西日本7/8)

高感度地震計を設置 九大筑紫キャ  
ンパス 警固断層を常時観測  
(朝日7/8)

九大准教授ら四十一人に奨励金  
三島海雲記念財団  
(日経産業7/8)

九大、白金の使用半分に  
携帯・PC用に実用化目指す  
(日経産業7/9)

半導体の現場 大学生が体験  
人材育成へ新事業  
九州大、熊本大、大分大、宮崎大  
(西日本7/9)

諫早湾干拓 開門で漁業・農業の両  
立を 経塚雄策九州大教授  
(朝日7/10)

若手研究者を育成  
福岡水素エネルギー戦略会議  
九州大学伊都キャンパス  
(日刊工7/10)

九大病院にヘリポート  
急患搬送など活躍  
(西日本、毎日、朝日7/11、12、20)

福岡水素エネ会議〇八年事業計画  
福岡県や九州大学などが連携  
(熊本日日7/11)

九州大新総長に有川副学長選出  
(朝日、読売、日経、西日本、長崎、熊本日日、佐賀、  
大分合同、南日本、山口、日刊工、中国7/12、  
15)

大学情報まるわかりイベント  
ふくおかで学ぼう二〇〇八  
(西日本7/12)

夏季セミナー受講生募集  
九州大学大学院システム情報科学府  
(読売7/15)

建築構造テーマ 十八日に講演会  
日建設計と九州大構造物防災系研究室  
が共催  
(西日本7/16)

学研都市に産学施設  
北九州市開設 二社が開発拠点設立  
(毎日7/16)

邪馬台国への道 いよいよ九州上陸  
西谷正名誉教授が徹底解析  
(朝日7/17)

生涯学習アラカルトセミナー  
熱中症とその対策 井上尚英名誉教授  
(夕刊テリ7/18)

九州の技術に注目  
九州大学大学院システム情報科学研  
究院 古川浩准教授の研究チーム  
(西日本7/18)

「男女共同参画」九大でセミナー  
九州大学女性研究者支援室  
(西日本7/19)

天神セミ異変 工事で樹木激変  
紙谷聡志九大准教授調査  
(西日本、朝日7/19)

九大同窓会が発足  
異業種間交流など促進  
(宇部日報7/19)

「男〇〇ハワークシヨップ」  
視覚音楽への新たな地平  
九州大学大学院芸術工学室  
(西日本7/19)

市民公開講座「うつ病からの回復を目  
指して」久保千春九州大病院長  
(読売7/20)

サンゴ再生に潜水記録活用 鹿児島・  
与論島のNPO法人と九州大学  
(西日本、朝日7/20)

発信機装着のアカウミガメ  
二回目の産卵も神湊で  
九州大学大学院・自然保全研究室  
(西日本7/21)

摂食障害とは  
久保千春・九大病院長に聞く  
(西日本7/22)

望む医療地域が決める  
新福祉一医学研究院教授  
(日経7/22)

アマミノクロウサギ製と骨格標本  
収蔵 九大総合研究博物館  
(南日本7/23)

九大、和解金「肩代わり」  
教授英書盗作 本人負担は四分の一  
(西日本7/26)

G8大学サミット 梶山千里学長が  
「エネルギーキャンパス」計画を紹介  
(読売、西日本7/26、28)

知の拠点 伊都キャンパス 環境に  
付加を与えない水素エネルギーの研  
究  
(読売、日刊工7/26、29)

肝がん予防 最新医学を紹介  
九州大病院の医師五人  
(西日本7/27)

高校生興味津々ノーベル賞受賞者講  
座 九大伊都キャンパス  
(読売7/27)

人の手の器用さ追及 九州大知能口  
ポット研究室 長谷川勉教授  
(読売7/29)

九大工学部が公開講座  
客船の世界の魅力と科学革命  
(読売7/29)

九州大など産学連携支援事業を選定  
文部科学省  
(西日本、熊本日日、南日本7/30)

九大、人工島で熱源実験 豊富な地  
熱活用には壁 発電所の新設でまず  
(西日本7/30)

統合的な学問体系に  
「自動車科学」専攻 九大が来春開講  
(日刊工7/31)

実験と講演で海と船を学ぶ  
「海と船を知る教室」  
九大工学部伊都キャンパス  
(西日本7/31)

国内魚越境 生態系乱す  
九州大と岐阜大 共同調査  
(朝日7/31)

## アメリカ合衆国マサチューセッツ大学 アムハースト校と学術交流協定締結

平成二十年九月十二日（金）、マサチューセッツ大学 William J. MackKnight 名誉教授、Shaw Ling Hsu 教授が、大学間学術交流協定書を携え、梶山総長を表敬訪問しました。

梶山総長は、マサチューセッツ大学から二〇〇六年四月に名誉同窓生賞及び同年五月に名誉博士号を受賞しましたが、これを契機として、マサチューセッツ大学アムハースト校との協定締結について協議を開始し、今回の締結に至ったものです。

同大学の工学部及び自然科学部と本学の工学研究院及び総合理工学研究院とは部局間の学術交流協定を締結していましたが、大学間の協定締結に伴い、今後は他の分野での交流の拡がりも期待されるということです。

## 梁三永文庫

平成二十年九月十一日（木）、梁三永（ヤン・サミュエル）氏が（故人が生前に収集、所蔵していた日韓関係の書籍約一二、〇〇〇冊、一九六五年から二〇〇六年までの韓国関係新聞スクラップ及びジャーナル多数を、夫人である梁栄子氏が九州大学に寄贈されたことに対して、感謝状贈呈式を行いました。

これらの文献及び資料は現在では入手が困難であるため極めて貴重なものであり、戦後様々に語られてきた韓国論・日韓関係論に関する研究や在日韓国人の戦後史の解明に大きく寄与するものであり、本学の教育及び研究環境の整備に大きく貢献することが期待されています。

寄贈された文献及び資料等は、工学部四号館二階に「梁三永文庫」として所蔵され、目録等の整理が行われた後に有益な学術情報として広く公開される予定です。



welcome to Kyushu University

ようこそ九州大学へ

## 韓国 東国大学校工科大学長

平成二十年七月十四日（月）、チョー・ソング東国大学校工科大学長が、梶山総長を表敬訪問しました。

東国大学校は平成十七年に大学間交流協定を締結していますが、今回は、工学研究院との研究者及び学生の具体的な交流について協議を行うため、チョー・ソング東国大学校工科大学長が来学しました。

また、表敬訪問終了後は、伊都キャンパスにおいて工学研究院の教員と意見交換を行いました。

## 台湾 淡江大学学長

平成二十年九月十一日（木）、張家宜（チャン・フローラ）淡江大学学長が、梶山総長を表敬訪問し、大学間学術交流協定を締結しました。

本年七月に淡江大学において張家宜淡江大学学長と梶山総長が会談した際に、協定締結について協議を開始し、今日の締結に至ったものです。アジアを重視した本学にとって、対外的なネットワークが更に拡張されることを期待されるということです。



調印式後、今後の研究者及び学生の具体的な交流について、活発な意見交換が行われました。

## ドイツ ホーエンハイム大学学長

平成二十年九月十九日（金）、リービツヒホーエンハイム大学学長が、梶山総長を表敬訪問しました。

ホーエンハイム大学と本学、特に農学研究院とは長年にわたり研究者及び学生の交流が活発に行われていますが、平成二十年度大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援）（総合戦略型）に採択された「アジア農学教育の国際プラットフォーム形成」においてもホーエンハイム大学と同盟しており、更なる交流が期待されます。



# 大宝 九至

## 表紙写真説明



# 世界人物図巻

『世界人物図巻』（九州大学文系合同図書室蔵）は、江戸時代初期より製作されたはじめた世界民族図譜の一例です。縦二十九・一cm、総長八七六・一cmの卷子仕立てで、巻頭に三艘の外国船（阿蘭陀船二艘・唐船一艘）、つづいて四十カ国の人物が基本的に男女一人ずつの対であらわされ、人物図の傍らに国名とその国についての短い説明文が書かれています。

巻末に落款・印章のある城義隣は、江戸時代後半の長崎の町絵師です。彼の作品には、外国との交流を示すテーマが多いのが特徴です。「鎖国」体制下の江戸時代、人々はこのような作品を通して海外に対する知識欲を満足させていたのでしょう。

（総合研究博物館 准教授 宮崎克則）

## 編集後記

およそ十年前、それまでの官報的な「大学広報」に代わる九州大学のPR誌を発刊しようとして「九大広報」はスタートしました。まだ広報と宣伝の区別も定かでない中で、隔月半年六回発行、全ページカラーなど全く無謀とも思える試みを手探りで開始したものの、果たして記事や写真が集まるだろうかとの不安を払拭できませんでした。しかし、All the News Fit to Printをモットーに、この間の急激な大学改革の情報記録の鑑となり、外部に向けたメッセージ発信源の役割を果たすことができました。また本誌はもう一つの柱を「Human Story」として、多様な本学関係者の人物紹介「シリーズ九大人」を一貫して継続し、学内外で好評をいただいて参りました。本号でちょうど59号。このたび他部署に転任する臼杵広報室長はじめ関係された皆様、この十年間、文字どおり59号のようでした。

広報担当理事 柴田 洋三郎

梶山総長が九月三十日で任期を終えられました。インタビュにもあるとおり、統合・法人化・移転に正面から取り組まれた六年十一月ヶ月でした。梶山総長退任と同時に、十年半にわたって現在の広報体制をリードし支えてくださった柴田副学長が医学研究院に戻られます。信念と九大への愛をもって寄せ来る大波小波を表で陰で裁いてこられたお一人と今回任期を終えられた理事の皆様、広報担当として改めて御礼を申し上げます。

広報室長 臼杵 純一

今年三月に九州大学教育学部を卒業し、このたび幸運にも、母校での広報活動に携わらせていただくこととなりました。フレッシュマンということで、今の私の利点は「学生に近い視点」をもって広報活動に当たれること。「九大広報」にも新たな視点を持ち込めればと思っております。さて、今回はアヴァンティ・村山社長のインタビューに同行いたしました。村山社長の仰っていた「記事には書き手の価値観が反映される」という言葉。己が発する言葉、発信する情報は、多かれ少なかれ受け手に対して影響を与えるということを再認識させられました。その点を肝に銘じて「九大広報」の作成に当たらせていただきますので、今後とも「愛読のほどよろしく願っています」。

広報室 末永 みらい

## 九大の最新情報は「九大広報」の定期購読で。

九州大学同窓会連合会では、九州大学の姿をご理解いただくため、同窓生や在学生のご家族の皆様をはじめ、広く一般の方々にも「九大広報」の定期購読をお願いしています。定期購読は一年間六巻分（隔月発行）三千円でお受けいただけますので、ご希望の方は、同窓会連合会事務局までご連絡をお願いします。

九州大学同窓会連合会事務局  
TEL.092-642-4328 FAX.092-642-2113  
E-Mail sycdo-rengo@jimu.kyushu-u.ac.jp

